339
1149
道友社

始

特212
911

借物十講

関条治著

天理教道友社

序

只今、四百五十枚餘りの原稿を書き終へて私は思ひます。このペンも、この紙も、この手も、この眼も、そしてこの智恵も、皆借物であります。この天地、一つとして親様の御慈悲によらぬ存在はありません。靜かに考へて下さいませ。何といふ大きな慈悲の世界でありませう。

私はこの限り無く廣く大きい御恩の一部を知つてゐる者です。とても〳〵その全てを知つてゐる者ではありません。御命のまゝに、借物十講と題しましたが、こゝには、この大きな借物の相の一部――僅か私の胸に讀み得るものだけを書かせて頂きました。

願はくば、讀者諸氏と共に、日に〳〵新たなる心境を造り、この大きな御恩を少しでも、廣く大きく悟らせて頂き度いと思ふのであります。

× × ×

御教祖親様なくして、私の理の親、東本初代會長はありません。初代會長なくして、私はないのであります。初代會長あればこそと思ふ時、今日結構な道を歩

ませて頂いてゐる私は、無限の感激と感謝に包まれてしまひます。私の胸は、この親の御恩を思ふていつも一杯になつてをります。

それでお話の座に立ちましても、胸には私の御教祖親様があり、目には初代會長の俤がありまして、御教祖親様を語り、初代會長を語り、私のお話はいつもこれで盡きてをります。そして、私は、親を語り得る子供の幸福さに、又、感激を新たにするのであります。

本書もやはり、御教祖を語り、初代會長を語つてしまひました。實際、初代會長を語る可からずと云はれると、私の話は何もなくなつてしまふのです。

親を語る、親をもち出す、可愛い奴と思召して下さい。

昭和十一年八月二十日

みちのくの旅にありて

關　粂　治

借物十講目次

第一講　因　緣……（八）
内を亂すもの　知らぬ姿
見通し　潰滅の影

第二講　親　心……（三五）
貧乏百姓　夏の綿入れ　月日の分靈
斷れば增す　親心を讀む

第三講　德　と　句……（五三）
日印會商　見方、考へ方　一の句と二の句
試驗問題　株式話

第四講　心・言・行……（八一）
甘露臺の姿　筍問答　無言の宣傳
人の慰め　人と信仰

第五講　足　納……（一〇六）
非常手段　白と黑　寢る兒は育つ
切れ味　盲目助け　蒔き付けの春

第六講　命　懸　け……（一四〇）
ダイヤの主　三人の姿　二月の水風呂
ダイヤの行方　借物の眞髓

第七講　順　序……（一七四）
窮まる道　逆立ち　神・人・物
成人の順序　道づれ

第八講　報恩……（一九六）
返し方　正座の涙
人のほめ方　重荷の價値
第九講　眞實……（二三四）
ハゼ料理　約束
一對一
第十講　教會……（二四〇）
見えて來るもの　遠き日
一束の菜　報酬

借物十講

第一講　因　緣

内を亂すもの

横町に入ると自動車の動搖がにはかに激しくなつた。ガクン〳〵と、上へ下へ、右へ左へ、身體は玩具のやうに振りまはされる。それまでが動搖の少いアスフアルトのいゝ道であつたゞけ、これが一層きびしくこたへるのであつた。

『どうです、大丈夫ですか』

私は思はず知らず病人を抱きかゝへるやうにして聞いた。

病人は並々の容態ではなかつた。脊髓を患つてセムシのやうに前屈し、そのために

肺と心臟とが強い壓迫を受けてゐるので、靜かにしてゐても、息苦しい程の身體であつた。それが、急激に搖り動かされるのであるから、どんなに苦しい事であらうと、そばにゐる私も母親も案じられるのである。

東本を出る時は三人ながら元氣よかつた。母親は先生がついてゐて下さるのですものと云ふし、私も、他の處へ行くのと違つて、初代會長様のお墓參りをするのぢやありませんか、大丈夫々々と元氣づけてゐた。然し、さうして自動車に搖られてみると、これではたまつたことではあるまいと、フト弱い案じ心が動いたのである。

『苦しくないか、運轉手さん、もう少し靜かにやつて下さい』

と云ふ母親の言葉の下から、病人は案外氣強い聲でかういつた。

『これくらゐのことは何でもありません。でもねえ先生、これが内らから攻められて苦しくなると、とても堪へ切れないのですよ。それに比べると、外から受ける苦しみ

など、少々のことなら大丈夫辛抱できます、どうぞ御安心下さい』

名言々々、全くさうだ、それに違ひないと、私は手を打つて共鳴した。

『あなたは素晴らしい眞理を摑んでいらつしやる』

私は、この病人の口から、まさかかうした名言を聞かうとは夢にも考へてゐなかつた。然し、彼の云ふた事は正に素晴らしい。素晴らしいとすれば、一言以て人の胸を衝く言葉は、切實なる體驗の中から生れて來るのだなあと、今更のやうに感心した。

内の苦しみと外の苦しみ。

魂の中に巣喰ふてゐる因縁が胸の中を搔き亂して來る苦しみを防ぐ只一つの道は、外の苦しみをするより外にないと信ずるのである。

身を神様にさゝげて、ひのきしんに汗をしぼる、これも一つの外の苦しみである。

百圓で生活してゐる人であれば、七十圓に切り縮めて三十圓を納消する、これも一つの道である。更に、一切を投げ出して助け一條に苦しむ、これも一つの道である。

人はこの外の苦しみを恐ろしいと見る。華やかに行き度い人生を無理に破壞するなどは以ての外だと云ふ。

『内から攻められて來る苦しみには、とても堪へ切れません』と病人は云ふた。そして、私は之を名言と手を打つて共鳴した。事實、靜かに目を閉ぢて人生の春夏秋冬を眺めた時、之を否定し得る人は斷じてあるまいと思ふのである。

思ひもよらぬ事情が突發する。あんな丈夫な人かと、意外に思ふやうな人が病にたほれて行く。

因縁が現れて、因縁の冷牙が身邊を搔き荒す時、人果してこれを平靜に眺めてゐられるであらうか。身上、事情から攻められてゐる時の心の苦しみ身の苦しみが、尙、

外の苦しみにおとるであらうか。

喧嘩をして負かされた時、人は皆口を揃へて、あんな奴に負かされる自分ではなかつた、殘念だ、口惜しいとなげいてゐる。人に負かされてこれ程にも殘念に思ふ人が、どうして、とるにもたらぬ、つまらない因縁に負かされて、何故に口惜しいと思はないのであらう。

因縁は心の内に巣喰ふてゐる。これは、いつ現はれるとも圖り知れぬ敵である。この敵を押へ付け、この敵を打破つて了ふものは、やはり私は、日々常々の、身と心をさゝげ切つた報恩一路にあると思ふのである。

知らぬ姿

或る夜、左の指を機械に切り落された方が訪ねて來られた。

その人の話では、その瞬間ヒヤッと感じたゞけで少しも痛まなかつた。五本の指が

飛んでしまつた瞬間、有難い、これで豫々から聞いてゐた中風の因縁が切れた、神様は中風のいんねんと五本の指とをふり代へて下さつたと、感謝の念が湧いて、手術の時も少しも痛まなかつたと云ふ事であつた。

痛むといふのは案じ心が痛むのである。指が無くなつた、しまつたことをした、これから先どうしてゆくのであらう、人前も恥しい事であらう、不便なことであらうと、案じる心が痛みとなるのである。

その人の場合は、感謝にあふれてをつて、少しも案じ心が無かつた。私はその信仰は結構に思つたが、然し、それで全ての因縁が切れたと、安心してゐられないものがあると、お話したのである。

『あなたのお父さんは何をしてゐましたか』

『百姓をしてゐました』

『然し、その百姓をやめられたについては何か事情があるのでせう』

『それに就いては父は一言も申しません。然し人の話にそれとなく聞きますと、どうでも拂はねばならぬ金があつたのに、その金を何かで無くしてしまつたのださうです。こんな事情からそこに居られなくなつて、まづ夜逃げ同様の引拂ひをしたのださうです』

『さうでせうね、あなたのお父さんには、それだけの因縁がある。一般的に申しまして、手のお手入れは殆どその横領因縁ですよ。だから、あなたの一家には肺病—氣狂ひの因縁があるから、私はこゝで安心してゐられない氣がする』

『その肺病ならもう出てゐます。妹の主人が先年肺病で出直しました。肺病因縁は、もうこれだけで帳消しになりませんか』

彼はニコ〳〵笑つてゐる。私も笑ひ乍ら話をすゝめた。

『それだけで帳消しにならん。今度の手の怪我が神様のお手引きなのですから、これを動機に眞劍に不自由を樂しむ生活をして頂き度いと思ひます』

帳消しにならないと聞いて彼は苦笑してゐられた。

『それでは露骨に申しませう。親が子となり子が親となつて恩の報じ合ひとも、因縁よせて守護するこれで末代しかとをさまるとも仰せられてゐますね。さうした因縁のお父さんの子に生れた貴方も、やはり、その因縁があるのですよ。そして子供の場合は、親の因縁にもう一つ輪をかけたやうな大きい因縁があるといふ事を自覺して頂かねばなりませんね』

因縁の自覺が出來れば——自分の魂に巣食ふてゐる因縁の姿をハッキリと見る事が出來たら、こゝに、明朗な報恩の生活が始まるのである。切り縮めた不自由な日々の生活が樂しく歩まれることになるのである。

秋に汗のついた着物をそのまゝ箪笥にしまつておくと冬の間は無事であつても、五月六月の雨季に會ふと黴が生える。旬が來ると、つけておいた汗がかびとなるのである。因縁はこの黴である。因縁の正體は全くつまらぬものだ。馬鹿らしいやうな奴だ。然し、この、つまらぬ因縁が働きかけると、おそろしい事になるのである。神様――月日様の分靈を頂戴してゐるお互ひではないか。こんなつまらぬ因縁に負かされてゐては、全く馬鹿らしい限りだ。

そこで私は、因縁自覺の根底として、前生因縁を知る方法を教へた。

さて、私の前生の姿を見る材料がこゝに三つある。

第一。私は小さい時、村のさゝやかな塾に通つた。子供のくせに、漢書が何よりも好きで、譯もわからぬまゝに四書五經の暗誦を樂しんでゐた。これがお寺の住持に可

愛がられる理由となつて、揚句、寺の小僧に貰ひ受けたいと云ふ處まで話がすゝめられたことがある。（前生寺にいんねんがあると悟る）

第二、やせた小柄なくせに、私は角力が大好きである。東京で商賣をしてゐた頃には、時間と金の許す限り見物に行つた。そして或る力士の傳記を出版して大損をしながら、別に苦痛にも感じなかつた。（前生は身體も大きく力が強かつたと悟る）

第三、私の右手の小指が曲つてゐる。これは少年時代にキャッチボールをして、その時にやつた負傷である。（右手の小指であるから女の理である。私は前生、人の妻君を横取りにした因縁があると悟る）

以上、三つを綜合して、私は、私の前生の姿を次のやうに見るのである。

昔私は比叡山あたりの僧であつたが、非常に力が強く身體も大きかつたので、豪勇無双の僧兵になつた。そして、京都に下りて行つては亂暴を振舞ひ、人の妻君を横

取りしてゐた――これが私の前生の姿であると信じてゐる。

これは、最も判りやすい一例として示したのであるが、かうして靜かに我が今生の姿を眺める時、子供時代に、人から教へられもせないのに好き好んだ事があつたり、自分ながら意外に思ふやうな事を何の氣もなくやつてゐるのを發見するのである。これが前生因緣の片々であつて、綜合し組立てゝみるとき、我が未だ知らぬ世界――生涯知る由もないと思つてゐた前生の姿も、更に亦、やがて來る可き將來の姿さへも、鏡に映し出されたやうに、ハッキリと見えて來るものである。

見通し

因緣の自覺に徹した人生ほど明るい人生はない。人生の感激も、信仰の躍進も、全てこゝから生れて來るのである。

『そんな不安に滿ちた見通し方なら、一その事何も知らぬ方がよい、知らぬが佛、む

しろ、無知の世界の方が餘程明るくもあり、樂しいか知れない』

と云ふ人がある。亦、さう叫ぶ人が多い。

そこで私は、汽車や電車の踏切りを考へてみるのである。

踏切りの慘劇は、常に見通しの利かない場所で演じられてゐる。見通しが利かない踏切りほど不安な危險な所は無い。見通しの利く踏切りは、走つて來る汽車がよく見える。見えるから靜かにその通過を待つて、こゝに平和と安らかさに抱かれた我が存在を見出すのである。

人生の踏切りに立つても、果して、見通しの利かぬ方が安全なのだらうか。それで本當に明るい人生があるのだらうか。

我が行路に横たはつてゐる因緣を知ると共に、その避け方をも心得てゐる程、安らかな、明るい人生は無い筈である。

若い娘さん達は口を揃へて云ふ。

『見合ひ結婚などが出來るものですか。長い一生を共に暮さねばならないのに、趣味も性質も知らない人とどうして結婚出來ます。親が承知してゐても私が承知出來ません。親の結婚ぢやありません、私の結婚です。暫く交際してみます。私の夫は私が定めます』

娘さん達は、半年か三月かの交際で、人生の見通しをつけようとする。見通しがついて晴れて結婚をすると意外なものが現れる。交際中は、お互ひに猫の皮を被つてゐたので見えなかつたが、恐ろしい爪が隠されてゐた。結婚後三年にして早くも、利かなかつた見通しを歎く。さうして、我が子供には、もう自分達のやうな眞似はさせまい、どうぞ、親の言葉に素直な、親孝行な子供を授けて頂き度いと希つてゐるのに、アテにしてゐる子供がやはり親譲りで、親の云ふ事を聞かない。

この人達は、何物をも見通し得なかつたけれども、第三者の私から見れば、結婚前から既に親不孝の夫婦には親不孝の子供が生れて來るといふ事を見通し得てゐるのである。

親が定めてくれた夫、親が喜んで擇んだ妻、可愛い子供に擇んでくれたのだもの、悪い筈はない、どうぞお父さまやお母さまの思召し通りにと、全てを親にまかせる—新思想からニベも無く排斥される日本古來の結婚ではあるが、親に孝行であつたと云ふ事から、この人達には決して親不孝の子供は生れないといふ事がハッキリと見通し得るのである。

自分に都合よい我が身思案から、斷じて人生の見通しはつけられぬ。因縁の自覺を透して、初めて確かな見通しがつくのである。

人生の嵐に吹きまくられて、哀れはかなくも消えてゆく人が餘りにも多い。

あんな徳のある人が……。

あんなに成功しなすつたのに……。

考へてみると、意想外な人が夢のやうに散つてゆく。

見る人、聞く人は、だから人生は無常だと歎いた。その譯をつきとめようとしなかつた。

人類の親なる神様は、人間の喜びを見て喜びとなされるのである。子供可愛い一杯の親心である。

徳のある人には、どん〳〵と恵まれる。その人は見る〳〵中に出世をする。然し、好運の波に乘ると、人はともすれば、この世界の絶對の眞理を忘れてしまふ。人は貧乏しても出世しても、忘れられぬことがある。それは、自分に與へられてゐる全て

は、それが名譽であらうと、地位であらうと、物質であらうと、智恵であらうと、みな神様からの借物であるといふ事である。自分に所得權のあるものは斷じて無いといふ一事である。

この悟りに盲目なる人が全盛期に、アッケ無く潰滅してゆくのであると考へる。

徳と因縁とは全然、別個の存在である。出世したから、因縁が切れたと思ひ込んでゐると、大變な間違ひである。神様は子供可愛い一杯の親心から、子供を喜ばせてゐて下さるのである。自分に恵まれるものが多くなればなる程、それに添ふた報恩がないと、噴火口の爆發のやうに、因縁が飛び出して來るのである。

身上の時、事情の時だけの報恩が、報恩の全てゞはない。人の地位、名譽、財産を超越して、人生の限りと共に添ふた報恩こそ、報恩の本道と云ひ得るのであり、これ

によつてこそ、全ての因縁を解消せしめ得るのである。

因縁を知ると云ふことは、顔や背に墨がついてゐるのを知るのと同樣である。背に墨がついてをれば、洗ひ落さねばならない。着物を脱いで、裸になつて風呂に入る。お湯は、火と水とである。風呂に入つて洗ふことは、換言すれば、月日親神樣に洗つて頂くことである。

何年信仰しても因縁の切れない人は、洗ひ方の下手な人である。

汚れてゐる箇所を洗ひ忘れておいて、元の姿のまゝで、お風呂に入りましたといふて澄ましてゐる人もある。因縁の自覺のない人の信仰の姿である。

汚れてゐる箇所を、ハツキリと見極めて、洗ひ落す。これでこそ風呂に入つた甲斐もあり、信仰の甲斐がある。因縁の自覺に徹した人の姿である。

願はくば、同じお風呂を頂くなら、きれいに洗ひ落したいものである。

第二講　親心

貧乏百姓

その時の私には、全く金策の道がなかつた。仕方ないので、たうとう家主から敷金を借り出して、やつと上級の御用に間に合はせたことがある。すると『おみちの信仰はそんな無理をしなくてもよろしいのに』と云ふて下さる人があつた。

私はいさゝかも無理をしたとは考へてゐなかつた。今でもさう信じてゐる。これで當然と考へてゐる。けれども借金しなければ出來ないといふ事については、その時は心の底から申譯ないとおわび申してゐた。何人に會つても頭が下つた。關と云ふ男は

御覽の通りの不德者で御座いますと、心が低くなつてゐた。

借金をしなければ御用に立たない私は、恰度貧乏百姓と同樣である。

旬が來ても、種もなければ肥もないといふお百姓がある。仕方ないとあきらめて坐り込んでをれば、折角の田も畑も荒れ果てゝしまふし、それ處か、さしあたりの食ひ扶持にも困らねばならないことになるのである。

そんな馬鹿をするお百姓はない。種も肥も借りて一生懸命に育て、秋の稔りを樂しむのである。

私の場合は恰度それである。借りなければ出來ないやうな不德者の私が、ないからと云ふて折角の旬を外してをれば、何時になつたら、神樣の御惠みを頂戴出來るのであらう。

種も肥もないからこそ、私は借りてゞもしなければ、立つてゆけないのである。

耕作の出來ないお百姓は、自分一人が食つてゆけなくなるばかりではない。幾人かの家族をも飢ゑ殺さねばならないことになる。

幾百人かの信徒の親として、幾十人かの教師の親として、亦、幾つかの部下教會の親として、親たる可き者は、これ等の人々の信仰の成長と糧とを、何れに求む可きであらうか。それは、つくしとはこびである。これ以外にもう一つの道は斷じてない。これを思ふとき、借金しなければならぬ程の者ならば、尙更、借金してゞも、この一つの旬に生きなければならぬのである。春の旬に生きることは、やがて迎へる第二の旬、秋に生かされることである。第一の旬を外して、第二の旬に生かされる道は斷じてないと思ふ。

然し、こゝに、尙一言を重ねておかねばならないのは、旬々のつくしはこびと、身上や事情の場合の納消とは全然別物である、といふ事である。

これに就いて、私には終生忘れられぬ、いたましい思ひ出がある。

今の教會の普請の完成が近づくとともに、私の唯一人の娘の身上が次第に重くなつていつた。それでも、私にはなほ一つの慰めがあつた。旬々の御用は何もとゞこほつてゐない、これで吐られることはないと思つてゐたのである。

さうして普請は完成した。請負人に最後の金を拂ふ日が來た。その日、私は、娘の寢てゐる隣りの部屋で、七千五百圓支拂ふた。同時に隣室の娘は出直しとなつたのである。

何といふ皮肉であらう。又、何といふ私はわからず屋だつたのだらう。普請の方はきれいに片付いて、何も殘らなかつたけれども、只一人の子供の出直しといふものが殘つたのである。

それから數年を經て、私はやうやく納消の眞理を摑み得た。そして、會長樣をつ

かまへて、口說いた。

『旬の御用が滯りなく運んでゐるといふ事が私をとても高慢にしてをりました。何故あの時に、あの普請金を納消しろと敎へて下さらなかつたのですか。會長樣は冷淡です。もつと强く仰有つて下されば、助かつてをりましたものを——』

口說いても詮ない事ではあつたけれども、さう云ふてゐる胸の中では、旬の御用と納消とは別物なのだ、それは決して人間の御都合主義に融通出來るものではないよ——と、悟られてゐるのであつた。

旬の御用のさし迫つてゐる時に、身上が出たり事情が出たりする。この場合、旬の御用を十分さして頂いてゐるから、身上の方は安心と定め込んではならぬ。旬の御用の方は、暫く御借りしておいても、先づ、身上さんげの納消が第一である。そして、この納消は何處までも、身上さんげの納消だけのものであつて、旬の御用に融通出來

るものではないのである。

旬の御用をお借りして、納消したことは、種と肥とを借りたことである。必ず收穫の秋が來て、きれいに返濟出來る日が惠まれるのである。

大木は谷間に育つ。低い處は廣いが高い處は狹い。低い所に水が集まりものが育つ。神樣の御望みは、何でも授けてやり度いから、お前達はどうぞ低い心になつてくれと仰有つてゐるのである。旬の御用をお借りした時は、私は全く低い心になる。ならざるを得ない。その時、

〃神樣はこの心を造れとおつしやるのだな、順調に御用が運べてゐたら、俺の高慢は押へ切れない程上つてしまふのだつた〃

と考へる。

この考へ方は間違つてゐなかつた。いつも豊かな秋の稔りをお惠み頂いて、借りて

ゐた旬の御用は充分に運ばせて頂けたのである。

夏の綿入れ

『そんなに納消々々と仰有いますが、それでは一體どうして食つてゆくのです、どうして着てゆくのです、どうして住むのです』

と、叱られた事がある。

尤もなお言葉である。一應は私も頷かせてもらふ。が、考へてみれば、この世界は、何と豊かな神樣の御惠みにみたされてゐることであらう。

たん〳〵となに事にてもこのよふわ　神のからだやしやんしてみよ

と仰せられてゐる。この世は神樣のふところ住ひである。衣食住は、親なる神樣が十分に用意して下さつてゐる筈である。これは、人間から心配する領分ではなくて、神樣の支配下にある領分である。隣りの女房や亭主の心配をしすぎると、世間から誤

解を受けることになる。吾々は、人の事は心配しなくてもいゝ、たゞ〳〵、可愛い、いとしい、神様の子供でさへあれば、足りるのである。

七月の暑い眞盛りに、私は、ゴッ〳〵した木綿の而も綿入れを着てお助けに出歩いてゐた事がある。その時、この綿入れ一枚が、神様から私に恵まれてゐたかけがへの無い着物であつたのである。

『關さん、今頃そんなのを着て、暑くはないのですか』

と、親切に尋ねて下さる御婦人があつた。私は、何とこの人は野暮な人だらうと思つた。自分は肌もすいて見えるやうな羅を着てゐてさへ暑い〳〵と云ふてゐるのではないか。木綿の綿入れを着てゐる私が暑いか、暑くないか、聞かなくても判りさうなものをと思つた。

『あなたはうすい物を召していらつしやる、それでお日様の光がよく透るでせう、それで暑いのですよ。私のこの木綿はね、生地がよくて光りが透らないでせう、だから少しも暑くありません』

こんな負けをしみを云ふてゐたが、實際はとても暑かつた。けれども、その暑さが一向苦にならない私であつたのである。

たつた一枚の夏着を買ふくらゐの金はあつた。七月のかゝりには、僅かながらも、全てを親教會にお供へしてしまつた。若し、その中から一圓もお借りして浴衣一枚買つたとて、まさか會長様のお叱りも、神様のお叱りも受けることはなかつたであらう。けれども、衣食住は自分の領分ではない、神様の領分なんだ、神様の領分を侵しては申譯ないと、一枚の浴衣にも手が出なかつたのである。

然し私は蒸し殺されもしなかつた。浴衣一枚買へない男ではあつたが、飢ゑ死にも

しなかつた。全てが神様のお恵みによつて生かされてゆく世界である。衣食住は神様が確かに保證をしてゐて下さるのである。

私は、お母さんのお胎からこの世に出ようとする瞬間、にはかに不安に襲はれた。かうして生れ出ても、果して生きてゆけるのかどうか私には見當がつかない。それがとても心配になつたので、神様にお伺ひした。

『私はもうすぐ生れますが、この世界に出ても食つてゆけるのでせうか、若し食つてゆけないやうな事なら、いつまでもこのまゝにおいて下さいませ、無理に生れ出たうはございませぬ』

すると神様は仰有つた。

『お前は何も心配せんでもよい。お前のお母さんのお乳はハリきつてゐるよ。このお

乳は誰彼なしに呑ませるものではない。お前一人のものだ、神が保證する、食べる事は心配いらん』

それでも私にはまだ不安があつた。

『食べてゆけても着てゆけるでせうか。今はなか〳〵寒い時候らしうございますが、着物も無しに凍え死ぬのなら、このおなかの方がどれ程溫かいか知れません。無理に生れたうはございません』

神様はニコ〳〵笑つていらつした。

『何をつまらぬ先案じをしてゐるのだ、お前は。聞いて御覽よ、家中はあの通りの大騒ぎぢやないか。もう、三日も四日も前からこの通りの騒ぎなんだよ。若しお前が男ならこの着物、女ならこの着物と、親達は山程の着物を準備してゐるぢやないか。さあ心配しないで生れておいで』

取越苦勞の強い私は、まだそれでも承知出來ない。重ねて神樣にお伺ひした。

『食べられても、着られても、住む家があるのでせうか。この寒空に、家がなかつたらどうしませう。私は生れるのが嫌です』

今度は神樣の御聲は少々強くなつた。

『馬鹿なことを云ふものぢやない。お前には立派な家がある。家どころか、お前のやすむふとんまでも、そこに敷いてある。生れたら、食べさせる事も、着せる事も、寢かせることも、準備は整うてゐる。これでも、まだ心配があるか。お前には、お前が可愛い一杯の親がついてゐる。何も彼も安心して、さあ生れておいで』

これだけ聞かされて私は安心した。そして、それでは生れませうと、この世に生れ出したのである。

私は、神樣とかうした固い約束の下に生れたのである。神樣のお言葉に嘘のある筈

はない。決して飢ゑない、決して凍えない、決して野宿しないといふ確信がついてゐる。七月の綿入れは勿論暑い。が、私は蒸し殺されもせずにゐたのである。

その月の半頃に、東本の初代會長が見えられた。御挨拶に出る私の姿は、やはりドンックぬのこのまゝであつた。

『關さん、あんたはまだ綿入れか？』

『ハイ……』

『どうしてそんなものを着てゐます』

『ありません、これ一枚が私の全部です』

『買へばよろしいのに……』

會長は涙を流してゐられた。私は心の中で、

〃私は買ひません、これは私の領分ではなくて、あなたの領分です〃

と、つぶやいてゐた。

『關さん、私も初めて東京に出た頃は、六十日も家がなうて、あちら、こちらと歩きまはりました。軒に立つてゐると追はれるし、公園のベンチに休んでゐると、巡査にとがめられるし、水ばかりで送つた日もありますが、ね、關さん、これで結構や…』

涙を流して會長は下に降りて行かれた。そして再び上つて來られた會長は、私の爲めに、一枚の着物を持つてをられたのである。

月日の分靈

この時以來今日に及んで、私はまだ一度も衣食住の不自由を知らない。

そこで私は思ふ。

若し私が、納消のお金の一部を拜借して着物を買つてをれば、今日でも、やはり、衣食住に追はれてゐることであらう。私は決して長い辛抱をしたのではなかつた。三

月から七月まで、僅か四月餘りの辛抱をしたまでゝある。神様は決して長い年限、不自由してくれ、苦勞してくれと仰せられてゐるのではない。三十年も四十年も、苦勞してくれと仰せになつてゐるのではなくて、僅か、三年千日通つてくれゝば、神はそれで受取ると仰せになつてゐるのである。

三年千日、このつとめが出來ない人間であらうか。吾々の魂は、月日様の分け靈を頂いてゐると聞く。夜も晝も、そして、遙かなる過去から遙かなる未來かけて、一分の休みもなくお働き下さるのが月日様である。その月日様の分け靈なら、三年千日くらゐのつとめが出來ぬ道理がない。

月日様のお働き、あゝ、それは何といふ大きな尊い、お姿であらう。月日様のお働きを眺めて感心出來る私は、私もやつぱり月日様の分け靈を頂戴してゐたのだなあと

思ふのである。

教會がやつてゆけません
お助けが上りません
私もやはり萬年宣教所でせうか
と歎かれる人々に、私は尙重ねて、月日様のお働きの姿を見直してもらひ度いのである。

お日さまは默つて上り、默つて沈んでゆかれる。すると今度は入れ代つてお月様の番である。お月様も默つて上り、默つて姿を消してゆかれる。そして、再び、お日様と交代されるのである。雨の降る時も止む時も、風の吹く時も止む時も、雨や風は、吾々人間には一言の斷りもないし、挨拶も無いのである。人間はこの中に生かされて

ゐる。一切の生物は息をしてゐる。

お日様も、お月様も、雨も風も、まだ一度だつて人間にお禮を云つてくれと要求されたとは聞いてをらぬ。永劫無限に憩ひなき宇宙の動きは、全く無條件である。

『夜の目も寢ずに……』と、親が子をいつくしみ育てる親心をかく云ふのである。思へばこの世界そのまゝが、この親心にみちあふれてゐるのではないか。お日様もお月様も本當に、夜も寢ずに子供の成人出世のみを待ちこがれてゐられるのではないか。然も、その親心は無條件である。何等求める處なく、只、默々と、子供の成人にのみ御心を碎いてゐて下さるのである。

我々は、この月日様の分け靈を頂戴してゐるのである。その魂の本質は、やはり、月日様同様に、お禮を要求せずに、人の爲め世の爲め國のために不斷不休の活動をさして頂ける筈である。が、悲しい哉と、人の世の姿を眺めては歎かずにゐられなくな

るのである。

おみちの中でも、ひのきしんをしても、おつくしをしても、一言の挨拶を期待する人間心のあさましさを思ふ。それでは、月日様の分け靈の本質の輝きは何處かへ消え去つてゐる。吾々の魂は、そんな汚ない小さいものではない筈だ。何も云はず、そして無報酬で眞實をつくした勤めを勤めぬく處に人間の歩みの中にも、月日様の御働きと合致した境地が開かれるのであつて、そこに、月日様が世界二十億の人間と、萬物を抱きかゝへてゐて下さるのと同様に、吾々にも、幾千、幾萬の人々を抱きかゝへてゆける理が與へられるのである。

斷れば増す

庄屋敷村、中山家の門前に、『參拜人お斷り』と書かれた日もあつた。御教祖の御身邊には、時を問はず、迫害と干渉とがまつはりついた。それでも、日に月に、御教

祖を慕うて歸つてくる信者がふえていつたのである。

金をふやしたい、智惠をふやしたい、身體を丈夫にしたいと希はぬ人はない。智惠や身體のふえる道は、使へばふえるのである。人の爲めに、さゝげてゆけばふえるのである。之は誰でも諒解しやすい、そして實行もしやすいのである。

金の問題になると、誰も二の足を踏む。机上の眞理は解つてゐても、その實行が容易に出來ない。

二十圓の旅費を持つて東京に行く。所用を果して歸る時になつて、尙五圓餘つてゐたとする。その五圓を神様にお供へしてゆける人は少い。

『無事、東京につれて來て頂きまして、御守護を頂いて用事をすませました、有難う御座いました』

と、最後の五圓をも、勇ましく神様に捧げて行ける人は少い。それでは、實際問題

として歸るに歸れないのだから、行ひ難いのは、當然と云へる。

然し、こゝに、その五圓をなくしてしまつても、歸れる道があるのである。これは机上の空論では摑めない眞理である。議論を超越した世界である。

私はおたすけに行く時、歸りの汽車賃を持つて行つた事がなかつた。歸れないといふ不安は微塵もなかつた。鐵砲玉のやうに、歸ることを知らずに、たゞ飛んでいつたが一度として歸れなかつたことはない。

それでも、時には、歸れるかしらと、案じた事がある。そんな時には、必ず歸りの汽車賃は持つて行くことにした。案じ心が、神樣のお働きを止めて、金がなければ歸れない事になるからである。

人間の案じ心を捨てゝ、常に、神と共に、死線とすれ〳〵の紙一重の危ない道を歩

いてゐる人の姿は、何といふ氣高さであらう。その氣持ちを考へる時、私はたまらない氣持ちになるのである。

歸りの旅費も持たずにお助けに行く——背水の陣を敷いたその姿こそ、眞に神一條にもたれきつたものである。

以上は、たゞ歸りの汽車賃の問題であつた。然し、更に一歩をすゝめて、行く先、幾何とも圖り知れぬ人生の行路に——歸りの問題ではない、これから行く問題である——無一文で歩み切る勇氣を何人に見出し得るであらう。

人は金が賴りである。

親は子が賴りである。

物にたよつてゆかねば、人生の行路は歩み得ないと考へてゐる。人の情にすがらね

ねば人生歩み難しと考へてゐる。

若しも、金や情が、人生を支持してくれる全てゞあるとし、之を極めることが、人生哲學の全てゞあるとするならば、天理教祖のひながたは、一體、何と云へばよいのであらうか。

田地がどし〳〵と施されていつた。着物も二枚三枚と減つていつた。果ては、田地もなくなり、着物もなくなつた。さうして、母家までがこぼたれて、御教祖はその土煙りの中に佇みながら、「さあこれから人助けの道が始まるのや」と、ニッコリせられたのである。人夫達は、不思議で不思議でたまらぬと云ふ顔を見合はせながら、お祝ひにと出された赤飯に箸を運ばせてゐた。

御教祖は、入つて來るものを斷られたゞけではなかつた。現なまを、手當り次第に手放して、窮乏のどん底に落ちながら、莞爾として、ぢばの榮えを說かれ、ぢばに、

世界集まる樂しい日の模樣を、目の前に見るやうに指し示されたのである。

人は、今日裸になれば明日の日を考へる。明日の日が闇である。十年先、二十年先は尙のこと見えぬ、黑白も分たぬ眞の闇である。

どうして食ふ、どうして着る、どうして住む？

と、この三つが卍となつて明日の日さへも眞暗にしてしまふのである。

人生は斷じて、そんな賴りないものではない。何一物はなくても、輝かしい人生行路の見透しがつくのである。天理教祖は、この最も、明瞭な雛形を示されてゐるではないか。

不自由なき樣にしてやらう、神の心にもたれつけ

と、仰せられてゐる。

『さうすれば、かう出來ません』

といふ人間心を捨てゝ、我身思案をすてゝ、勇氣一杯、神樣の御手にころがり込みさへすれば、生きてゆく道などは、撰擇に迷ふ程あるのである。

親心を讀む

或る年の暮れであつた。

『會長樣、うちの娘の思ひ切りの惡いのに、ホト〳〵困ります。親として、こんな情けないことはありません』

と、參拜に來た婦人が私をつかまへての口說き。

その婦人の娘さんは、最初は相當な家に嫁いだのであつたが、主人の失敗から、にはかに貧乏世帶となり、弱り目にたゝり目と云ふのか、又その子供が身上となつた。

そこで、母親が日參して娘に別席の精神定めを說くのであるが、娘はなか〳〵承知し

ないと云ふのである。

『お前もこゝで精神を定めて親樣の御力をお借りしなければ駄目ぢやないか。わたしは何もお前に出來ない事をすゝめてゐるのではない、別席運びの精神さへ定めてくれたらよいのだよ——と申すので御座いますが……』

『娘さんは何と云ひました』

『それがね。この年の暮に、どうしてそんな餘裕があります。お母さんも、あたし達の世帶は御存じでせう。お正月ですもの、子供の着物も一枚ぐらゐは買つてやらねばならんし、まあ、もう少しお持ち下さい——と云ふのですよ。

『私の胸には、ちやんとつもりがあるのです。精神定めさへしてくれたら、旅費も私がしてやらう、子供の着物も私が買つてやらう、と思つてゐますのに、親の心は子知らずで、なか〳〵精神が定まりません。

『一その事、私の氣持ちを明かしてやらうかとも思ひましたが、それでは、あの娘が神樣に受け取つて頂く處は一つもないぢやありませんか。

『私は、今日しみ〴〵と思ひました。私でさへも、親の心に飛び込んで來ない子供の心が情けないのですもの、神樣と私達との間も、こんな事を繰返して、神樣にどれ程の殘念なお思ひをかけてゐることであらうと、さんげしてをります。

『その通り〳〵』

私は婦人の肩を叩いて云つた。

『その悟りの出來たことが、あなたには、どれ程の德か知れませんよ、本當にその通りだ』

神樣は、子供を喜ばしてやり度いと、待ち構へていらつしやるのである。子供が、

神樣のふところへ飛び込んで來るのを待ち構へていらつしやるのである。

親の心が讀めなければ不安である、さう易々と飛び込んでゆけないかも知れない。然し、私達には、親の心を讀むやうなむつかしいことはしなくてもよいのである。神樣の方から、親の心は、かうだよとお教へ下さつてゐるのである。

にんけんもこ共かわいであろをがな　それをふもをてしやんしてくれ

と仰せられてゐる、これほど確かなことはない。

いかほどにくどいたとてもたれにても　きゝわけないがをやのさんねん

と仰せられてゐる。

吾々は、きゝわけのよい子供でありたい。そして、神樣に、しつかりと抱きかゝへて頂き度い。人生、これに越した確かな歩みは、もう一つと無いであらう。

第三講　德と旬

日印會商

日印會商を終へて歸國せられた時、有本氏（東洋紡績營業課長）の土産咄は面白かつた。

『どうでした』

『御蔭をもちまして上首尾でした』

『新聞でいろ〳〵と情報が傳へられて、ずゐぶん心配してをりました』

『自分の智惠や力ではどうにもならないやうな場合が澤山ありましたが、その場合を

征服させて頂いたのは、全く御供米の御守護によることゝ思ひます』

有本氏が神戸を出發せられる時、私は送別の志に御供米をお贈りした。

『德が力ですよ。德が切れたら、いゝ智惠が出ませんよ。智惠も力も神樣の借物ですからね、難しい問題に行き當つた時は、この御供米をかんで、心を靜めて下さい。神樣がきつと、いゝ智惠を貸して下さいますから——』

かう云つてお見送りしたのである。

『難問題に行き當る度に、一寸席を外して、御供米を頂きました。すると、不思議ですね。フト妙案が浮んで來るのです。議席に戻つて話をすゝめると、必ず好調にすゝみました。全く、あれは私の人間力ではありません。神樣の御力、これが只一つの頼りですね。然し、今度は、いよ〳〵私の不德さが歎かはしくなりましたよ。神樣の御力を自由用自在にお借り出來るやうな德を積んでおき度いと思ひました。まだ〳〵日

頃の納消が足りないのですね』

『それもさうでせうが、さういふ風にお考へになられるといふ事が、既にあなたは徳のあるお方だからですよ。不徳の者は、なかなかさう素直な考へ方は出來ないものです』

有本氏は常日頃から、恩報じの歩みを怠らない人である。月給二十七圓で東紡に入社してから、大學卒業の錚々たる人と肩を伍して、今日の地位を得るまで、只々、納消の一路を歩んだのである。

有本氏は仕事が思ふやうに捗らない時は、自分の不徳の致す處と、納消をした。上役と意見が衝突した時も不徳として納消した。

かうした有様であるから、月々納消の機會は多かつた譯である。さうして、トントく拍子に出世をしたのであるが、この人の納消のし方が少々普通ではなかつた。見方

によれば、大いに風變りなのである。

奥さんはおみちの人でない。そして、月末には月給袋をそのまゝ奥様に手渡し、その中から小遣ひを貰ふのであるから、思ひ立つた時に、右から左へ理を運び得なかつたのである。

そこで有本氏は一考せられた。

現金を運べないので、その折々に、神様に手形を發行したのである。それを、盆と年末に清算して、ボーナスの中から納消してをられた。それがもう十何年と續いてゐる。今年の七月にも、やはりさうして、昭和十一年の上半期分を清算せられた。

私は有本氏の並々ならぬ出世は、この日々の、切れ目の無い精進がある爲めと信じてゐる。

一度の理を運べても、二度三度の理を運び得ない人もある。二度目、三度目には、

必ず自分勝手の都合から神様にお斷りしてゐるのである。さして頂ける旬をさし向けられてゐても、尙、それに添ひ得ない人は餘程德のない人である。神様の旬を、我身思案から素直に見ることが出來ない、――之は、何よりも德の無い證據である。

德のある人と無い人とは、物の見方、考へ方が百八十度に正反對である。これは爭ふことの出來ない事實である。

見方、考へ方

私は初代會長に仕へた數年間、會長の目や心は、何故これ程にも素晴らしいのであらうと思つた。

同じ人間の目で、同じ世界の樣子を眺めてゐるのである。それに、會長の云はれる事される事は全て私の意表に出るものばかりであつた。

德の相違だと、しみ〳〵思つた。德のない――伏せ込んだ力のない私自身の姿のみ

じめさを、いやと云ふ程見せられた。

或る時、お供をして淺草方面に行つた事がある。會長はフト立ち止まつて、淺草の觀音堂の方に頭を下げられた。

こんな遠方から何も頭を下げなくてもよいのにと思つた。何か譯があるのではなからうかと思つた。思ひ切つて尋ねてみるとかうである。

東本がまだどん底の頃、或る寒い夜に參拜に來た人がある。

『その晩はとても寒くてね、遠くからわざ〳〵來て下さつた人に、せめて火なりと差上げ度いと思ひましたが炭がありません』

そこで、會長は、わざ〳〵炭を買ひに出られたのであるが、何處の炭屋もこのお客さんを相手にしない。たうとう、訪ね〳〵て淺草まで來てしまつた。

『さうでせうよ、その時、あたしはね、たつた二錢より持つてゐなかつたのですよ』

淺草のと或る炭屋が、初めて、この二錢のお客に炭を賣つてくれたのである。會長は急いで歸つて、その信徒に火の御馳走をされたのであつた。

『あの時は本當に有難かつたよ、あの炭屋さんがなかつたら、私はどんなに困つたことでせう。この御恩は忘れられません。この近所を通る時には、いつも、その夜を思ひ出すのですよ』

私は、結構なお仕込み有難う御座いますと、心の手を合せた。二錢の恩どころか、神樣の御恩も解らない私である。

二錢の恩をいつまでも忘れない會長と神樣の御恩もわかり兼ねる私——何うしてこれ程の開きがあるのであらう。靜かに考へてみるとき、私は、會長の德と、私の德の相違だと思つた。德を積んで、きれいな心になつて、二錢の恩も忘れないやうな明るい魂になりたいと願つた。

世界でも、商賣に成功する人としない人とを比べてみても、頭のよさ加減には、さう大した違ひはない。唯、一寸した考へ方の相違がある。つまり德の相違がある。

丸ビルの下に有名なコーヒー店があつた。流行ること、流行ること、素晴らしい人氣である。遂に、その老舗は五萬圓とまで云はれた。

何が、それ程素晴らしいのであらう。

或る日、その主人と話してゐた人が、フト奥を見ると、一人のお客がソッと角砂糖の容器を開けて、失敬してゐるのである。

『一寸々々、あれを見なさい。あんな事をしてゐられては損をしますよ、一杯や二杯のコーヒーで計算が合ひませんよ』

主人は輕く笑つてゐた。

『なあに、こちらは少しも損はしません、お客さんが損をするんですよ』

主人の言葉は正に金的を射て名言である。その店では、角砂糖を客席のテーブルに出しておいて、お客が自由に使へるやうにしてあつたのである。

東京や大阪の盛り場に行くと、同じ様な構への小店が非常に多い。しかし、その中でも、お客が押し〳〵の盛況を見せてゐるのは、僅か數へる程しか無いやうである。流行つてゐる店は、何處か變つた處がある。一寸まねの出來ない處がある。

名物料理を賣る譯でも無いが、教會も土地處に非常に多い。だが、流行つてゐる教會、榮えてゐる教會は數へる程しか見られない。その教會は何處かに變つた味を持つてゐるのである。擔任者の精神が、普通よりは一寸變つてゐるのである。

親の言葉をそのまゝに聞けない人

人の缺點ばかり見えて來る人

これは德のない人である。親から良い事を云ふてもらつても、それが心に治まらないのは、その良い事を身に受ける德がないからである。

或る娘さんが結婚するについて、兩親のすゝめる候補者に、どうしても喜べなかつた。兩親はその候補者を逃すのは、如何にも殘念でならなかつたが、娘が承知しないから、しかたなくあきらめた。やがて、第二の候補者が出て來た。今度は娘さんも承知して結婚した。

かくて數年、主人は事業に失敗して相當にあつた資產を根こそぎ失つてしまつた。娘さんは大きな家から裏長屋に入つて、子供を負つてオシメの洗濯をしなければならないやうになつた。

娘さんは、夫の不甲斐性がしみ〴〵と思はれた。毎日々々見るにつけ聞くにつけ、

不足の種ばかりである。思ひ出されるのは、親達のすゝめてくれた第一の候補者である。彼は、その後出世して縣知事にまで進んでゐた。

〃あの方と結婚してをれば〃

と思ふにつけて、尙更、現在の夫に不足が出る。さうして、たうとう病氣になつた。

おみちの話を眞劍に聞くやうになつたのはそれからである。この人は高い望みを持つて夫を撰んだのであるが、悲しい哉、德がなかつた。それで親の言葉を素直に聞けなかつたのであつた。

可愛い子供の爲めを思ふて云ふて下さる親の聲、神の聲だもの、それに違ひのあらう筈はない。私はいつも〳〵、この聲を、どうぞ理窟を挿むことなく、素直に受けて

行けるやうな德のある人となりたいと願ふのである。

德を持つて生れて來る人もある。然し、どんなに澤山な德を持つてゐても、それを使ふ一方ならば、やがて元の奎阿彌に立ち返る日がある筈である。私は、德に包まれて生れた人間ではない。たとへ持つてゐたとしても、二つか三つくらゐなものであつたらう。その僅かな德も世界で働いてゐる時代に使ひ果してしまつた。おみち一條となつた時は、德にも物質にも本當に丸裸であつた。

これでは本當の働きが出來ないと思つた。一生懸命に納消した。大阪にゐた頃會長樣から頂く二錢の風呂錢も、賽錢箱に投げ入れた。その頃、その二錢は、時々私に與へられる只一つの收入であつたのである。

德の無い者が、德を積まうとする努力は、並大抵ではない。だが、來る可き魂の次の世界を考へる時、私は、この一生はたゞ伏せ込みに終つてしまつてもよいと考へ

てゐるのである。

御教祖様も、結果を見ずに、御昇天遊ばした。天保九年以來、これぞといふ安き日は一日もなく、迫害と干渉のさ中に御昇天になつたのである。

有難い雛形である。勿體ない雛形である。私は今生に於て結果を見たいとは更に願はぬ。因縁の穴埋めと徳の構築に、生涯を棒に振つても、いさゝかも悔いはないのである。

私には、輝かしい來世がある。

一の旬と二の旬

親の聲を純眞に受け入れてゐる人は、旬に生かされる人である。

一を持たぬ人には、二はない。一の旬を外した人には、二の旬が來ても立ち上れないのである。

或る時、腹痛の人のお助けに行く助け人をつかまへて、私は、

『君、あの細君は内緒金を持つてゐるよ、今日行つたら、それを定めさゝなければ駄目だぜ、今日がその旬だ、今日を外したら、再びその旬が來ないよ』

と、注意した。彼は、頷いて出て行つた。暫くすると、彼は元氣なく歸つて來た。

『どうした。云つたか』

『いや、それが、云ひそびれたんだ』

『馬鹿だね君は、もう駄目だ。もう旬は逃げたよ』

『いや、明日は是非とも……』

『さあ、明日の旬が來るかね』

その翌日行くと、病人は床に居なかつた。裏から前掛けで手をふき〳〵出て來て、

『先生、お蔭様でもうすつかり御守護を頂きました』

と、ケロリとしてゐた。

やつぱり、旬は逃げてしまつてゐたのである。彼は再び、元氣なく歸つて來た。

それから暫くすると、その家にめんだうな事情が起つて、明るい幸福が逃げてしまつた。細君の義弟が、その内緒金を借り出し、色情に果してしまつたのである。

『君この結果は一體どうだ。だから僕があの時に、特に君に注意したんぢやないか。どうせ、こんな事に果されて、事情の種になる金だと思つてゐたんだ』

後の祭りで致し方のない事ではあるが、二人ながら、旬は外せない、第一の旬にしきらなければ、第二の旬は無いものだとつくづくと考へさゝれたものである。

試驗問題

この心すむしわかりた事ならば　そのまゝみゑる事であるなり

と仰せられてゐる。

旬が見えぬ。旬がわからんと云ふことは、その心が澄み切つてゐないのである。

にちゝにすむしわかりしむねのうち　せゑじんしたいみえてくるぞや

全く、成人してゐない子供は、繪本しかわからないのである。旬の見きはめが付くまでの心の成人、これが何人にも望ましいのである。

東本の初代會長の信仰を一言にして云へば、報恩、納消の一路を突進せられたのである。何時、如何なる旬の御用にも、おくれをとられた事はなかつた。それでゐていつも、

『こんなことでは申譯がありません』

と、少しも安心してをられた事がない。第二の旬の御用、第三の旬の御用は常に前の御用に申譯なさを感じて、尙一層の拍車をかけてのつとめ振りであつた。

旬に生きてをられた會長は、いつも、きはどい處で、目のさめるやうな神樣の御

働きを頂いてをられた。それは全く、神と倶に歩む、人間放れのした姿であつた。

或る時、私は會長の御供をしておぢばに歸ることになつた。準備も出來、汽車の時間も迫つて來たので、催促してみるのであるが、仲々、動かれさうにもない。

時間は愈々迫つて來た。私は氣が氣でない。

その時、教會に自動車を乘り付けて、あわたゞしく馳け込んで來たのが杉原氏の夫人である。會長の前に坐るなり、

『これは少々で御座いますが――』

と云つて、一封の理立てを差し出した。會長はニッコリせられた。

『待つてゐました。さあ、關さん行きませう』

と、立ち上られたのである。

何と現金な人と、あきれてゐると、驛に行く途中での話だ。

『關さんは急き立てるけれども、私には、どうしても、もう千圓お金が足りない。もう千圓ないと、定めたゞけの御奉公が出來ません、誰か持つて來てくれるに相違ないと思つて、實は待つてゐたのですよ』

と云ふのである。

會長は決して魔法使ひではなかつた。けれども時間ギリ〳〵に、恰度、その千圓が與へられたのである。私は、心が澄みきつてをれば、そこまで見えるのだと思つた。

我身思案がいくら上手になつても、こゝまでの見透しはつくまい。理の苦勞に澄まされた心に、凡てが見えて來るのである。

さて、これは後日の話であるけれども、その千圓の由來が面白いので、こゝに紹介さして頂くことにする。

杉原氏はその朝（會長が東京を出發する日）いつものやうに自家用自動車に乘つて商業會議所に走つた。

その途中××橋の近所まで來ると、あやまつて、道ばたに遊んでゐた子供を轢き倒したのである。

子供は泥まみれになつて泣き叫んだ。早速、附近の病院に駈け付けて診察してもらふと、何と云ふ奇蹟、身體に一點のカスリ傷もないのだ。着物が汚れてゐるし、子供は泣き叫ぶし、キツと大怪我をさした事であらうと思つてゐたのに、結果は餘りにも意外なのである。

内出血もない、打撲傷もない、骨折もない、子供はたゞ驚いて泣いてゐたのであつた

杉原氏は出勤が嫌になつた、何となく氣がすゝまぬ、そのまゝ家に引返した。さうして夫人との物語りである。

『お前がいつも云つてゐるが、今日こそ神樣の御守護といふものを見せて貰つた』

『本當にさうですね。若し殺しでもしたらどうです』

『それぢや一生寢醒めが惡い。たとへ殺さないまでも、不具者にしても氣持ちが晴れぬことだらう』

夫人は無言である。

『これは、お前がいつも云つてゐるやうに、大難を小難にして頂いたのだから、神樣にお禮をしなければ惡いね。幾らすればいゝのだ。百圓か……』

『……』

『三百圓か』

『……』

夫人は主人の顏を見詰めたまゝ、默つて一言も云はない。

『五百圓か……』
夫人はまだ頷かぬ。
『ぢや、千圓か……』
『まあ、それくらゐはね』
夫人は、初めてニコッと笑つた。そして、千圓の金を貰ふと、主人の乘り捨てた自動車で、早速、教會へ飛ばしたのであつた。
後日、主人は云つてをられた。
『三十圓か五十圓もあれば藝者を笑はせますが、家内をニコッとさせるには千圓いりますよ』
と笑つてゐられた。

旬の御用は、神樣が吾々に提出される試驗問題である。この試驗を通らなければ、次へ進めないのである。
親から『しつかりやれ、しつかりやれ』と云はれる。
『命懸けでやつてをります。きつとやります』
と元氣よく答へてゐる。然し、事實に於て出來なければ、日頃から旬に生かされるだけの德を積んでゐなかつた何よりの證據である。
試驗にパスした時は、子供は身のおき處のない程よろこんでゐる。それにも增して親の喜びは大きいものである。お祝ひに、何を買つてやらうと、心配する。よくやつてくれたと、子供を抱き上げて泣かんばかりになつてゐる。
通つてくれるかしら、落第するのではないかしら、と、試驗が濟むまでの親の苦勞は並大抵ではない。それだけに、この及第の喜びは大きいのである。

私達は旬の試驗に及第して、神様から何の褒美を貰つてゐるのであらう。褒美は、教勢の上にハッキリと現れてゐる筈である。

伸び上つてゐる教會と、縮まつてゐる教會。

これは旬に及第してゐる教會と、落第した教會の二樣の姿であると思ふ。

常々に納消の道に餘念なき人に德が授かり

德の授かつた人は旬々に生かされ

旬々に生かされる人は伸びて行く

かう云へるのである。

株式話

おぢばから神戸に歸る途中の事であつた。

商都大阪の心臟、北濱を通りすがりに、ふとバスの窓から街の樣子を見ると、モー

ニングを着た人が多勢ゾロ〳〵と歩いてゐる。

『今日は何事ですか』

『株式取引所の落成祝ひがあつたのでせう。もう終つたやうですね』

隣りに坐つてゐた人が親切に教へてくれた。

〃お祝ひの後の淋しさか〃

こんなことが、フト私の頭をかすめ去つた。人々は全く、ゾロ〳〵歩きである。ホノ淡い醉ひ心地に足を運んでゐるが、間もなくその醉ひも醒めてしまふのであらうと、つまらぬ事までも考へた。

教會に歸ると、株屋の一信徒から電話がかゝつて來た。

『會長さんですか、實は大株を少々持つてゐるのですが、賣つたものでせうか、どうでせうか』

『僕は天理教の先生だ、株屋ではないよ。そんな事を知るものか』

と云つて、二言三言冗談事をしやべつてゐると、つい二時間程前、バスの中で頭にひらめいた、

〃お祝ひの後の淋しさか〃

と、いふ事が、再びサツと私の頭を通り過ぎたのである。私はその影を追ふやうに云つた。

『賣んなさい、賣んなさい、今すぐ賣んなさい』

『有難うございます。では早速と賣りにいたします』

かうした相談は早いが勝ちである。電話はそのまゝ切れてしまつた。

その晩、その人がいそ〳〵として教會に來た。

『先程は有難うございました。御蔭樣で大助かりをしました。何と、私が賣つてから五分もたゝないうちに、四圓六十錢も下つたのです。處で、會長樣の見越しには驚き入りましたが、會長樣は株に經驗がおありなんですか』

『私は株屋ぢやないさ。然し、一つの眞理だけは摑んでゐるよ』

その人はいよ〳〵不思議さうな面持ちであつた。

『ぢや、その譯を話さう。

實はね、今日こちらへの歸り道、北濱でモーニング景氣を見たんだ。あんたは株屋だから知つてるだらうが、取引所の落成祝ひがあつたね。モーニング景氣といふのはそのお祝ひ景氣だ。御馳走を並べ、シヤンペンを拔き、なか〳〵賑やかである。心もウキ立つて陽氣で明るい。人の心が喜びに溢れ、ハリきつてゐるから、勢ひ株の値もいゝ譯でせう。

『然し、その反動がある。祝宴も濟み、會場には人影もなくなる。さうしてあたり一面に折箱の殘骸が轉がつてゐたり、テーブルの上は御料理皿と倒れたコップとが落花浪藉を極めてゐる有樣は、まことに淋しいものだ。所謂、晩春の淋しさと云ふ奴さ。今までの喜びが、夕暮れの影のやうにサアーッと消えてゆく。そこで、人の心も醉ひ心地から醒めて淋しくなる。勢ひ株の値も下落する譯になるね。

『天理教は陽氣に勇む宗教である。いづむことは大嫌ひである。私は、天理教の先生で、株屋ではないけれども、勇む術だけは心得てゐる。いづんだら損をし、勇めば儲かるといふ事だけは心得てゐる。

と說明したのであつた。

淋しい教會、人の集まつて來ない教會は、人の來るのを斷つてゐるのである。擔任

者の心が勇めば、どん〳〵と、ものゝ景氣が出るのである。

擔任者が、衣食住の問題に心を取られて、なさけない顏をして居て、惡きを拂へる道理がない。拂ふどころか、却つて埃がつく。埃がつくから尙いづむ。いづむから——淋しくなるから人が集まらぬ。淋しさに加速度が加はるばかりである。

かうして教會の株が下落するのである。おつくしが下落するのである。

立教百年祭は目前に迫つて來た。今將に一歩手前にある。これはもう、一分二分を爭ふやうな緊迫しきつた旬である。

田舍の田や畠の植付けならば、たとへ、十分や二十分おくれても問題にはならぬ。秋の收穫に、十分のおくれが影響することもない。が、都會では、値が出るのも、値が落ちるのも、二分か三分の運命にかゝつてゐる。この二分、三分が生死の鍵となる。

百年祭のさし迫つた今日、この旬は株式の旬にも匹敵するものと考へられる。今やグヅ〳〵して、出足をおくらしてゐる場合ではない。勇ましく突進しなければならぬ場合である。

神様は、一に勢ひと仰せられてゐる。

グヅ〳〵してゐるものは、そばにも寄り付けない様な素晴らしい勢ひが望ましい。景氣のよい馬力のかゝつた勢ひさへあれば、教會の株も上る。旬の御用にも必ず間違ひなく十分につとめさせて頂ける、と確信する。

第四講　心・言・行

甘露臺の姿

雨が降れば雨に濡れる、雪が降れば雪が積る、明けても暮れても、風に曝され埃をかむり……雛形甘露臺は地場の原點に立つてゐられるのである。

この甘露臺のこの姿が、そのまゝ八百萬天理教徒に尊いひながたであると信ずる。例へば西瓜を考へてみる。汚ない畑の上に轉がつて、雨に打たれ、風に曝され、埃にまみれてゐる。どんな叮嚀なお百姓さんでも、これを掃除しないのである。そんな酷い目にあつて、西瓜はさぞかし辛いことであらうと同情してはいけない、これでよい

のである。西瓜にはこれが最も尊い環境なのである。

柿でも桃でも……其の他ドンナ果物でも、皆このいためらるゝ中から、あの、したゝるやうな甘露を授けられてゐるのである。

人生常に春の日ばかりではない。人生常に味方に取卷かれてゐるものではない。むしろ、雨や風になやまされる日が多い。吾々のやうに神の用木であれば、苦勞もある難儀もある、貧乏もある、お助け先には冷たい反對の劍もある。

だが、天理教徒には、この、苦勞、難儀、貧乏が唯一の財産であることを忘れてはならぬ。苦勞、難儀、貧乏を拂ひ落してはならぬ。かゝつて來る埃はそのまゝかむつてゐるのだ、吹き付ける雨風にそのまゝ吹かれ濡れてゐるのだ。これが吾々には一番の財産なんだ。なぜなら用木の甘露はこの中から授けられるからである。

『神樣にもたれて……』とは、誰も常に口にする言葉である。然し靜かに考へてみるとき、本眞劍に神樣におもたれするのは、月の中どのくらゐあるだらうか。年に何回あるだらうか。追ひ詰められて、人間思案ではどうにもかうにもならなくなつた時、その時に初めて、『神樣にもたれる』のが私達である。

苦勞がなければ、難儀がなければ、反對攻擊がなければ、私のやうなつまらぬ魂の人間は、たうてい神樣にもたれられないものだと思ふてゐる。

神樣にもたれてゐる時、吾々は神樣に最も近づいてゐる時である。人間思案を忘れて、神一條に心の淨化されてゐる時である。そして、神樣の自由用自在の理を見せて頂く時である。

甘露臺を中心に、今私達は、南北から向き合つて拜んでゐるのである。向ふ側に虫の好かぬ人がをつても、敵がをつても、甘露臺を中心にするときは、お互に拜み合ひである。

敵同志の拜み合ひ

何と美しい、平和な姿であらう。これこそ甘露臺の世界とでも云ふのであらうか。

おぢばには、毎日、時々刻々にこのひながたが示されてゐるのである。そこで私はこの世界には、所謂『敵』は絶對に存在しないと考へるのである。

芽生えの春と、落葉の秋とは正反對である。暑い夏と寒い冬とは、互ひに相容れぬ存在である。然し、この反對同志、敵同志が集まつて一年といふ完成の姿を造り上げてゐるのである。半弦の月が二つよると滿月である。

私は、私の向ふに敵が現れた時、初めの中はなか〳〵喜べなかつた。それがやがて

理論上、これでいゝのだと足納出來るやうになつた。もう一息の精進だと一生懸命になつてゐる中に、最近になつて、心から喜べるやうになつた。敵が現れた時の、その時の私の環境は、滿月にあるのだと、ハッキリ自覺出來るやうになつたのである。

御教祖五十年の御みちすがら、一日として敵の無い日はなかつた。それを教祖樣は大きく抱きかゝへて行かれた。少しも敵對されたことはなかつた。警察行きを迎へに來る巡査に、

『御苦勞樣でした』

と犒つてをられるのである。食事時ならば、

『このお方にも御飯をさし上げてや』

と仰せられてゐるのである。そして、櫟本に御苦勞になる時も、奈良に御苦勞にな

る時も、いそ〳〵として、お出かけ遊ばしたと聞くのである。おや様には敵はなかつた。あの物凄い迫害と干渉の中を、只、ハイ〳〵と云つて歩まれたのである、そこから生れたのが今日のおみちである。満月の道である。

自分の價値は常に五である。敵の價値も亦五である。敵を抱きかゝへて十になるのである。敵を反撥してゐる時は、五ある可き自分の價値は、三にも二にも減つてしまふ。敵こそ、自分の足らざるを足してくれる尊い存在である。

嵐はもつと吹きつけてくれてもよい、雨も雪も、もつと降つてくれてもよいと、儼然たる甘露臺の御姿を拜する時、私は私自身を省みて、いつもかう思ふのだ。

おみちの信仰の中にあつても、人事にふれて問題を起したり、不足不滿に心をいた

めてゐる人が多い。

神の用木として、これでは餘りなさけないではないか。今更、物や人に、ひつかゝつてゐるやうな場合ではないと思ふ。

筍問　答

昔から『四知』と云はれてゐる。

如何に密謀を凝らし、誰も知る者はないと思つてゐても、密謀の坐に侍つた相役と天と、地と、自分の四人は知つてゐると云ふのである。

之は支那の言葉で、私は別に有難く思はない。おみちの悟りは、もう一段すゝんでゐるからである。

私は、私の蔭の心遣ひを、環境の人は皆よく知つてゐると思ふのである。

之は説明のない私の悟りである。敢て、説明を付するならば、先づ第一に、見抜き

見通しの神様はよく御存じの筈である。次いで、この世界は神様の御身である。之は支那の聖人も教へてゐない。天理教に依つて初めて教へられた眞理である。神様は、

『たん〳〵となに事にてもこのよふわ、神のからだやしやんしてみよ』と仰せられてゐる。既に神様が御存じならば、神様の御身體中なるこの世界が知らない筈は無いのである。私の思ふてゐる事、秘めてゐることは、假令、一言半句も喋べらなくとも、電波のやうに環境の人々の胸に映つてゐる筈である。

それで電車の中で知合ひの人に會つても、頭が下る。下げずにはをられない。

『先生々々と云はれてゐますけれども、私は今こんな汚ない心使ひをしてをりましたあなたも、よく御存じでせうが、まことにお恥しい次第です』

と、心が低くなるのである。

見えて來るもの、現れて來るものは、全て私の心使ひの反映である。私の心使ひが本で現れてゐる事象は末である。吾々は、常に、本を探ねて歩まねばならないのである。結果にとらはれてゐては、何もわからなくなつてしまふのである。

筍だ〳〵、と騒いでゐるうちに、竹になつてしまふ。議論の正體は何處かへ姿を消してしまつて、何もわからなくなつてしまふ、世間の議論にはこんなのが多い。

我が心使ひをよく調べて歩んでをれば、何が見えて來やうと、現れて來やうと、うろたへる必要は更にない。見えて來れば、それに捉はれずに、本を訪ねて、本を改良すればよいのである。

無言の宣傳

心にあることは云ひ易いが行ひ難いといふ事はない。云ひ難いが行ひ易いのである。歸省子を迎へる母親に多辯はない。心にあることは全て動作に現はれるのである。

言葉の多い時は駄辯である。感激の無い場合である。感激の高調した時は、言葉は何の役にもたゝぬ、言葉よりも、涙が先であり、動作が先である。

東本の初代會長が、いつか婦人會總會の時演壇に立たれたことがあつた。『助けのおよし』とて評判の高い人である。今日は素晴らしいお話が聞けると、皆たのしみにしてをつた。

『御教祖おや様は……』

會長の言葉はこれで切れた。そして、後はハラ〳〵と涙をこぼしてをられるばかりであつた。滿場の聽衆も共に泣いた。會長はもうこれ以上話せないのである。話す可くは、餘りにも、御教祖様の事で心が一杯なのであつた。

私は五十六期に教校に勤めさして頂いた。教會を留守にしてゐるので、氣にかゝる

事もあつた。然し、私が、どんなに大きな聲で叫んでみても神戸まで聞える道理がない。私は、默つてゐてもよいのである。甘露臺に運んで、日々のつとめに充分であれば、教會員一同は皆、無事に連れ通つて頂いてをるし、教會は御守護頂いて、旬々の御用にも事を缺かなかつたのである。

殺人や詐欺や……等々。

新聞の記事には餘り良い話題が載せられない。人の世の惡事が、大いに宣傳せられる。惡い事はこんなに宣傳せられて、忽ちに日本國中に廣まる。大きい惡事なら、世界中にも報道される。

惡い事がこんなに廣まるのならば、良い事は尚それ以上に廣まる筈であると考へるそれは、新聞に載せられなくてもよいのである。吾々は、新聞に報道されなければ、効果がないやうに思ふが、それは、物に捉はれた考へ方である。

御教祖親様は、大和の寒村三島にみちを説かれた。その頃は新聞もなかつた。教祖様の金言は、只、御教祖によつてはた〳〵の人に直接に説かれ、書き止められたにすぎない。然し、人々は、雲霞のやうに集まつたのである。それも、一時的の昂奮や感激ではない。年と共に、御教祖の御言葉も、雛形も、光輝を増すばかりである。人々は益々多く集まるばかりである。

私が、おたすけに當つて、一人對一人で盡す『誠眞實』は、少しも宣傳されなくてもよいのである。そのまゝ忘られてしまつていゝのである。御教祖様の御聲も雛形も文字や聲で宣傳せられなかつた。理が流れて、人の心に入つたのである。

惡事でさへ廣まるのではないか。人が命をさゝげて、つくしきり、運びきるこの誠眞實は、時間を超え、人種を超えて波紋を描くのである。

人の慰め

『會長さん、今あの人が、會長さんはえらい人だと云つてほめてをりました』

と云ふと、

『恩を着ては申譯ありません、關さんこれを納消して來ておくれ』

私は、初代會長から渡された札を握つて、神殿に飛んでいつた事が幾度あるか知れない。

或る人が工場で負傷して病院に入つた。作業中の負傷で、之は公傷と呼ばれて、傷が全快するまで、ゆつくりと休めるのである。

彼の負傷を心から同情する人々が、毎日々々見舞つて、やさしい慰めの言葉をかけてゐた。彼は、この人々の慰めを聞くのが嬉しかつた。澤山の同情を寄せてもらふのが、彼の負傷に名譽を添へるやうにも思はれて、それを聞くのがつれなき病床に何よりも樂しみであつたのである。

『毎日、大勢見舞ひに來て下さいました』

彼は私にもさう云つて、嬉しさうであつた。

『先程も云つたでせう。それが恩を着るといふことになるのですよ。あなたは、あたりまへだ、と思つてるでせうが、その考へ方が、根本的に間違つてゐる。人からほめられてさへ、申譯ないと云つて納消するのが、このみちの信仰ではありませんか。その人々のやさしい慰めの言葉を、得々と受けてゐてはなりませんよ。起きられるやうになつたら、その恩報じをしなければなりませんね』

と話した事がある。

人はともすれば、神樣よりも、人にほめてもらひたいのである、人に慰めてもらひたいのである。これが人情であるけれども、私は、これを人情として默過し得ないのである。

なぜなら、人にほめられ、なぐさめられてゐる時が、その人の爲めに、その時が一番危險狀態にあるからである。

人から攻められてゐる時は、斷じて天の攻めは無いのである。ほめられて、浮き上つた時に、親樣の手が、一寸頭を押へられるのである。

まはりの人から攻められてゐる時、私は、私が助かりたい、功を樹てたいと願はない。どうぞ環境の人々に助かつて頂きたい、この人々が助かつて下さるならば、私はどうなつてもよいと思ふ。

その時の私の心は、グッと深く、人の下へ下へと喰ひ込んでゆく。それは決して浮き上つたものではない。然し、我が心に、この時ほど、陽氣な、明るい、朗かな境地は、外に見出し得ないのである。

朗かになりたい、明るうなりたいと願はぬ人は一人もない。これは、現代の痛切な願ひである。

政治の明朗化
社會の明朗化
工場の明朗化

と、何でも彼でも、『明朗化』の三字が附隨せられる。

この『明朗化』が最近、おみちの中にも入つて來た。世界から敎へられるおみちではなかつた筈である。いさゝか解せぬ次第である。

明朗化を叫んで果して明朗化されるであらうか。朗かにならうと思つて、思ひ通り朗かになれるであらうか。

考へて計畫して準備して明朗になれるものではない。明朗ならんと欲する人に、私

は敢て一言する。

『誰も彼も朗かになりたいのですよ。明朗化を叫んでそれで朗かになれるのならば、今頃憂鬱にふさぎ込んでゐる人は無い筈です。吾々は神樣の用木ですよ。徒らに世界に迎合して聲ばかりの明朗化を叫んでゐることなく、おみちらしい明朗化を試みようではありませんか。

『おみちの明朗化は、歌つたり、躍つたりするのではありません。私は、心からの明朗は助け一條にあると信じます。おたすけの、眞實の苦勞、この中からこそ、抑へ切れない、潑剌とした明朗の泉が湧くのであると信じます。

御敎祖親樣の雛形。

明治七年の夏、三島の村民がおやしきへ雨乞ひを頼み込んだ。先生方は神樣の御許

しを頂いて蹶然と起たれた。雨は降つた。村民は歡喜の聲を擧げた。然しそこへ見舞つたものは、警察の干渉であつた。先生方は皆、雨に濡れたまゝの御姿で警察へ御苦勞下された。當局の目標は御教祖樣にあつた。先生方だけ拘引しても物足りないのである。揚句、御教祖も亦、御苦勞下された。さうして、皆一樣に、『水利妨害』の廉を以て罰金を取られたのである。

村民の爲めに祈り、――人の爲めに誠をさゝげて、我身は叱られ、罰金までも取られて、先生方は尙、歡喜に燃えてをられたのである。

私は、この場の光景を思ひ描く時、唯、これ等の先生方が、鮮やかな御守護の理の みを見て打ち喜び、その他の事は全て忘れてをられる、美しい姿ばかりが、頭一杯になるのである。

理を見て樂しむ、これが信仰の味である。

繪本を見て樂しむのは子供である。一歩すゝんで文字を讀んで樂しむ時がある。更に、進んで、繪も文字も離れ、理を見て樂しむやうになつてこそ一人前であると考へるのである。

御教祖親樣は、あのどん底の御生活の中にあつて、何をされたのであらう。暗い、警察の留置場にあつて何をされたのであらう。御教祖の御面は歎きに閉されたであらうか。愁歎に曇らされたであらうか。

いそ〳〵として陽氣にあふれてゐられたお姿が、管長樣の『ひとことはなし』の中に、躍つてゐるのである。

吟踊幾千度、愈々心の躍動を覺える『みかぐら歌』も『おふでさき』も、人間の目から見れば、窮乏と迫害と嘲笑の闇の中に、筆を染められたものではないか。

御教祖樣に助けられたものは、今日既に八百萬人を算するのである。將來、更に、

世界の人類が、抱擁せられて行くのである。御教祖のお助けは、線香花火のやうな一時的のものではない。末代かけて生きるものである。

本文を草しながら、私はふと、東本初代會長の或る日の姿を思ひ浮べる。

暑い日であつた。拭いても〳〵、汗がにじみ出る日であつた。

『お暑うございます。汗が出て、たまりません』

と挨拶した。

『私もこの通り、汗かきで、何枚ハンカチがあつても足りませんが、この汗も不足に出來ません』

と仰有るのであつた。

『東京に來て間も無い頃、毎日、水ばかり呑んでゐましたのでお乳が出ません。子供

に何も呑ませるものがありませんので、額の汗を絞つて、それを水に落して呑ませた日もありました。汗で子供が育つた日もあるのですもの、結構ぢやありませんか。不足には出來ませんよ』

と仰有るのである。

このお話を聞いて、私は何の言葉もない、只、胸をうたれるのである。

衣食住はもとより問題ではない、會長がされてゐた理の御苦勞の尊い姿に接した時、私はいつも、その度に、『この人の爲めなら命はいらん』と思つた。さうして、今日の私にして頂いてゐるのである。私は、會長によつて、末代に助けられたのである。

かうして考へる時、一時的のお助けは、半分の理しかないと思ふ。末代かけての助けこそ本當のおたすけであると信ずる。

御教祖様からでせう。御教祖様には御魂の御因縁がおありだつたのですから、さうある可きが當然なのですが、之を視角を變へて見ると、どうなります。人間の實の親元の神なる天理王命も、このおみちの素晴らしい信仰も御教祖といふ人格を通じて現はれたのではないか。

『あなたは嫌な先生と云ふ。然し、その嫌な先生によつてあなたは助けられてゐなさるんだ。こんな事を云ふて來られるといふのは、貴方はおみちに熱心なからだと思ひます。何か、目覺ましい理を握らうと思つてゐなさるのでせう。

『素晴らしい理は、平々凡々な處から出ませんよ。嫌な虫の好かん、先生といふ人格を通じなければ、その理は斷じて出ません。之は、私があなたの爲めに斷じて請合つておく。

人がよくしてくれたから、こちらもよくしようと考へる人が多い。

あいつはいつも俺をいぢめてゐるから、一度仇を打つてやらうと計畫してゐる人が多い。

然し、よくしてくれたらよくしよう、惡くすれば惡くしよう——では、畜生の考へ方である。畜生よりも、魂に德を持つた人間の考へ方ではない。

よくしてくれゝば尙よくする。

惡くすれば、もう一つよくする。

これが人間の考へ方である。

たんのうの信仰は、こゝを起點として、起るのである

機械文明は現代の華である。それは、正に日進月歩の素晴らしさである。

人手は次第に省かれてゆく

能率は愈々上げられてゆく

文明發達のためには、かくあらねばならない、非常に有難いことである。然し、この空氣が、おみちに入つた時、私は、おみちの生命は無いものと考へるのである。

人に說くだけ、話すだけといふ機械的な動き——手を拱いて機械の廻轉を眺めて結果だけを握らうとする——これは斷じておみちではないのである。

神の用木である吾々、——神の道具である吾々、あくまでも第一戰に立つて自らが働かねばならないのである。

人を使つた人が永劫に輝きのある人ではない。どんなに偉くなつても自らが使はれてゐられる底の人こそ、末代に生きる人なのではないだらうか。

機械化されたおみちは明朗を失ふ。

明朗の母胎は、助け一條の苦しみにある。

人と信仰

『天理教の信仰は結構です。やめようとは思ひませんけれども、うちの先生についてゆかねばならんのならやめます。あんなわからず屋にどうしてついてゆけるものですか』

とても〳〵の勢ひで訴へて來た人がある。

『そりやあんた、大變な思ひ違ひだ』

私は笑ひながら話した。

『このおみちはどなたによつて始められたのですか。立教の歷史を考へて御覽なさい、

御教祖様からでせう。御教祖様には御魂の御因縁がおありだつたのですから、さうある可きが當然なのですが、之を視角を變へて見ると、どうなります。人間の實の親元の神なる天理王命も、このおみちの素晴らしい信仰も御教祖といふ人格を通じて現はれたのではないか。

『あなたは嫌な先生と云ふ。然し、その嫌な先生によつてあなたは助けられてゐなさるんだ。こんな事を云ふて來られるといふのは、貴方はおみちに熱心なからだと思ひます。何か、目覺ましい理を握らうと思つてゐなさるのでせう。

『素晴らしい理は、平々凡々な處から出ませんよ。嫌な虫の好かん、先生といふ人格を通じなければ、その理は斷じて出ません。之は、私があなたの爲めに斷じて請合つておく。

人がよくしてくれたから、こちらもよくしようと考へる人が多い。

あいつはいつも俺をいぢめてゐるから、一度仇を打つてやらうと計畫してゐる人が多い。

然し、よくしてくれたらよくしよう、惡くすれば惡くしよう——では、畜生の考へ方である。畜生よりも、魂に德を持つた人間の考へ方ではない。

よくしてくれゝば尙よくする。

惡くすれば、もう一つよくする。

これが人間の考へ方である。

たんのうの信仰は、こゝを起點として、起るのである

第五講　足納

非常手段

一つの家庭を考へてみる。

『お姑さんは頭が古くて判らない』

と先づ若嫁の聲が上る。

『世間知らずの氣まゝ者、あれではこの世帶がもつてゆけん』

と、姑の目に角が立つ。

『そりやお姑さんが無理だ、少しは若い者のことも考へてもらはねばやりきれない』

と、息子が愛妻の應援に立つ。

『兄さんは姉さんに目がないのですよ、お母さん』

と、小姑が母親に味方する。

僅か一家中、四人や五人でも、皆が中心を失つてバラ〳〵になると、この通りである。繼がるところがなくて切れてゆくばかり、治まる處を知らないのである。

人を助け、人を抱きかゝへて通るのが、天理教徒の歩みである。それは、四人や五人の家族の場合よりも、遙かに大きい立場である。

お助けが上らない、之は切れる理である。

お助けが上つても、後が續かぬ、之も切れる理である。

切れる理を心に持つてゐるやうな、助け人衆では、神樣の御用はつとまらぬ。どんなものでも、何日々々までも、繼いでいつてこそ、助け人衆の持つ使命が果されるの

である。

たんのうは眞の誠、繼ぐ理、ふやす理

不足は切る理

と教へられてゐる。たんのうは正にお助け人の生命であり、不足は命取りと思ふ。

『大變です、どうぞ、一言のおさとしをお願ひ申します。病人はもう絶體絶命で、醫者は匙を投げて居ります。何とかして助かつて頂き度いと一生懸命になつてをります矢先に、今度は私の手許から火の手が上つてまゐりました。先方の云ひ分は、ずゐ分ひどいのです。たんのうだ〳〵と心に抑へてはをりますけれども、時には泣きたくなつてまゐります。この處、兩手に花ではなくて、兩手に蠟です』

かう云ふその人の顏は、憔悴しきつてをられた。おたすけの方にも心を運ばねばな

らぬし、事情に攻められるし、心は極度に亂れてをつたのである。私は、事情の經緯を聞いて、無理はないと思つた。

『私は、どうしても、その病人に助かつて頂きたいと思ひます。事情の方は、どうでもいゝのです』

『それでは伺ひますが、今のあなたに、その重病人を助けさせて頂く誠がありますか』

『さあ、あるのでせうか、さう仰有つて頂くと、無いやうに思ひます』

『向ふは醫藥も及ばぬ病氣でせう、つまり、人間を征服してゐる大きな敵ですよ。この敵に打ち勝つには、向ふが十の力なら、こちらは十五も二十もの力がなければ勝てますまい。十五の力、二十の力と云ふのは誠のことです。誠がなくて、どんなに貴方が力み返つても、助け得る譯はないと思ひますね』

『さうです、私もさう思はないでもありません、然し何分にもあの重病では……』

私は机を持ち上げるまねしてみた。

『この机はとても重い、私には持てぬ。子供には尙更もてぬ。然し、玉錦や、双葉山のやうな力士ならば輕々と持てるでせう。ものゝ重い輕いを定める標準は、そのものゝ目方ではなくして、持つ者の力量によります。あなたが病氣が重いと仰有るのは結局、あなたにその病氣に立ち向ふだけの力がないといふことですね。助け人の眞實誠の有無が、病の輕重をきめる標準になると思ひます』

『それでは、どうすればそんな大きい誠が出來るのでせう。私は、今のところ何もわからなくなつてゐるのです』

『事情のためにでせう。事情が折角のおたすけの邪魔になると考へてゐられるのでせう』

『まあさうです。たんのうはしようと思ひます。然し、餘りといへば餘りな仕打ちではありませんか、それを思ふと、なか〳〵たんのうの腹もすわりかねます』

『そこですよ、此處の悟り方一つが、お互ひ天理教徒に許された素晴らしい世界なんです。成程、今のお話では、ずゐ分殘酷な節です。あなたには、我慢の出來ない大きい惱みだ。神樣は一體どうしてゐて下さるんだとも叫びたい、あなたの立場だ。

『然しこゝが、たんのうのし處ですよ。神樣はたんのうは眞の誠と仰せになつてゐますね。だから、人が眞似ようと思つても眞似られぬくらゐのたんのうを致しますならば、そこに何人にも追隨を許さぬやうな素晴らしい誠が生れて來るのが道理でせう。この誠こそ、今のあなたのお助けに、無くてはならぬ唯一無二の武器ぢやありませんか。

『神樣はあなたに一つのてがらをさせてやりたい親心で一杯だ。たしかにあなたは神

様に可愛がつてもらつていらつしやる。事情を出して、こゝであなたにたんのうをさせようとなさる神様の思召は、お前にその病人を確かにまかせる。助けさせてやらう、神も加勢してやるぞと、仰有つてゐるのですね。

私はかう申し上げたのである。

『わかりました。よくわかりました。喜べます。勇めます。恨みに思ふ人は一人もありません。全部、私のための人達ばかりでした』

と勇んで歸つてゆかれた。

その後、どうなさつたかと思ふてゐると、彼の容易ならぬ『たんのう』一條から生れた『誠』は、見事に、難病を征服した。そして、なやみ拔いてゐた事情も、何等人間的作意なしに解決したのであつた。

思ふに、この場合の事情は一つの影繪にすぎないのである。影繪の裏にある正體を

知り得た時、歎きも、恨みも、悲しみも、一切の情が消え去つて、只、喜びのみが湧き上るのである。

彼がたんのうした姿を思ふ時、私も亦涙ぐましくなる。〃よくやられた、えらい〃と思ふ。これこそ人を助け度いと思ふ誠眞實から出來た、たんのうだ。

後日、私達が再び顏を合せた時、

『あの事情は神様の非常手段ですね。あの事情を君に與へるより外に、重病人を助ける道がなかつたのだよ。然し、よくあのたんのうをされた。私は心から敬服する。

『たんのうは繼ぐ理、ふやす理と聞かされて居るが、如何にもその通りだ。一時は君から切れかゝつてゐた人々が、事情がとりもつ緣で、今度はどんな事があつても切れないやうに結ばれた。教會が明るくなつた。病人が助かつて信者がふえた。全てはたんのう一つから芽生えたものだ。たんのうの力、實におそろしいものぢやないか。

と云つて、二人して神様の自由自在なる御守護の姿をたゝへたものである。

白と黒

白いものを黒いと云はれても、その通りでございますと受けてゆくのが、たんのうの一つの姿である。云はれる方に、さう云はれなければならぬ因縁があるのである。全て、因縁が正體で、見えて來るもの、聞えて來るものは、自分の魂の姿である。いつはりのない正眞正味の姿である。

されば、たんのうには説明がない。申譯がない。無條件で受けてゆく、これでいゝのである。

『先生これでも、たんのうしなければならんのでせうか』

その婦人は涙をポロ〳〵こぼしつゝ訴へるのであつた。

『親達が承知しないのを無理矢理にひつぱつて來たのぢやありませんか。全ては私が引受けますと云ひ切つて連れて來たのです。こちらへ來てから病人もどんなに喜んでゐるか知れません。親里なればこそと、泣いて喜んでをります。それに、どうしてこゝにおいて頂けないのでせう。私は、兩親に合はす顔がありません。一體、あたしはどうすればいゝのです……』

云ひたいだけの事を云はせておいて、私は一言も挿まず、靜かに聞いてゐた。云ひ盡してしまふと婦人は泣くばかりとなつた。そこで私は初めて、たつた一言だけ云つた。

『これでいゝのだ。かうなることが一番いゝのだ。いゝ譯は説明しない方がよい。説明すると理が消える。折角の、たんのうの絶好の機會だ。何も云はずに、このまゝを受けよう。

『たんのうしなければならないから、たんのうするのではない。それでは半分の理もありませんよ。無條件で心にをさめよう。これで理が生きる。理さへ生かしておけばこれでいゝ譯がわかる日が必ず來る。

婦人は默つてうなづいて歸つていつた。たんのうしてくれる賴母しい後姿を見送つて、私はいつまでも立つてゐた。そして、思ひ出されるのは、私の遠き日の事であつた。

或る時私は十萬圓の普請金をあづかつたことがある。私は、たゞあづかつてゐたゞけで會計の責任者ではなかつた。云はゞ金庫代りで、請求を受けるといつでも出す、出す度に上級の奥樣が支出控帳に書き込まれる、といふのであつた。

普請がすんでから計算してみると、帳尻が合はない。私の手許には、少しも金は殘つてゐないが、帳面の方には一萬七千圓の殘金とある。騷ぎは一寸大きくなつた。疑

問は一齊に私に向けられた。それは尤もな話である。

『關は昔が昔だから藝者買ひをしたのであらう』

『茶屋酒を呑んでゐたのであらう』

等々、散々な言葉を聞かねばならなかつた。まる〳〵三日三夜、私は責められ通しに責められた。

私は私の今生の因緣を考へた。……藝者買ひもした。茶屋遊びもした。主人の金も使ひ込んだ。これ等の一切が今かうして現れて來てゐるのだと思ふと、何と云はれやうが、攻められやうが、私には一點の歎きも悲しみもなかつた。

〃あれは人樣の聲でない、私自身の魂の聲だ〃

〃我が魂の聲に腹の立つ譯はないぞ〃

と思つた。

それで、云はれること一切を、

『左樣、その通り、御尤も』

と聞かして貰つたのである。

恰度三日目の事、その時も、又奥樣から散々に言はれて居る時、奥さんは其場にバツタリと倒れられたのである。私は皮肉にも會長からそのお授けを云ひつかつた。

『私の因緣の爲めに奥樣をはじめ多勢の人々を苦しめて居ります。申譯ございません……』

眞劍なおわびを申し上げ、さうして、奥樣の身上のお願ひをした。奥樣の人事不省は約七八分くらゐであつたらう。お授けを取次いで、暫くすると、正氣づかれた。そして、

『これは神樣のおしらせだ。間違ひは關樣にあるのではなうて、他にあるのではない

か、もう一度よく調べておくれ』

と云はれたのである。

勿論、事こゝに至るまでは、八方手を盡して調べられてゐたが、一萬七千圓の行方は杳として知れなかつたのである。だから今更調べてみたところで、同じ事を繰返すだけで何も發見出來るものか、とは皆が皆の思ひであつた。

暫くすると、一人が、

『わかりました』

と叫んだ。皆、おどろいてその方を見た。一萬七千圓の行方は判明したのである。

何故こんな事が今日までわからなかつたのであらう、それが、一同の不思議の種であつた。

元來私はおみちに入る時は丸裸であつた。世界で散々の埃をつけ——揚句一敗地に

塗れての入信であるから、徳があらうとは、夢にも思はなかつた。徳のない私が人並の働きは出來ないと思つた。そこで、資本いらずに、一番行ひやすい、そして、機會の多い『たんのう』の勉強をしようと思つた。今でも、私は自分に徳があると考へぬ。若し、いさゝかなりとも取柄があるとするならば、『たんのう』が幾分でも治まつてゐるといふ程度のものであると、私自身では思つてゐる。

話は元に戻る。暫くして問題の病人は一生懸命に運ばれた婦人の甲斐も無く、地方の病院で出直していつた。結果は、いよ〳〵、その婦人の爲めには惡くなつた。引受けてゐた病人が死んでしまつたのであるから、娘の兩親に合はす顏がない譯である。然るに事實は少しも顏が潰れなかつた。晴々と打ちとけて合はす顏があつたのである。天理教には大反對であつた兩親が、娘を死なしてゐながら、少しも感情を荒立て

なかつたのである。

若し私が『たんのう』の説明を教へて居たならば、キット婦人はその兩親に會つて事の次第を逐一説明してゐたに違ひない。人間思案——我身思案を臺とするならば、さうある可き筈である。さうしなければ、この身の立つ瀬がないやうに思はれる。説明して、果して先方を滿足させ得たであらうか。私には非常な疑問である。おそらく、喧嘩別れをして、兩方の面目丸潰れとなつてゐたに違ひないと考へる。説明なしで、申譯なしで、まるごとそのまゝ心に治めてたんのうした、我身の立場はどうなつてもよいと、自分を潰してかゝつたこの理が、先方をも生かし、自分までも活かされることゝなつたのである。

寢る兒は育つ

ふとんを敷いて『おやすみなさい』と云ふことは、

『今日はいろ〳〵と御心をわづらはされておつかれで御座いませう、どうぞ御ゆつくりと御心をお休め下さいませ』

この長い言葉を簡略にしたものである。快して、身體を休める意味ではない。身體が休めば出直しである。寢てゐる間も、肺も心臟も胃も腸も活動してゐるのである。心は休んでゐても、身體は休んでゐない。

熟睡してゐる最中に、あいつはにくい奴だ。今日はキツト昨日の仇をとつてやるぞと思ふてゐる人はない。少し金が欲しいなア、金があれば明日は藝者でも買ひに行くがなア、と、こんな樂しい計畫を立てゝゐる人もない。

眠つてゐる間は何も知らぬ。何も知らぬといふこの境地は、いさゝかも『我身思案』がない境地である。こゝに、神樣が入込んで下さつて、自由用にこの身體を御使ひ下さつてゐるのである。貸主が御入込み下さるのであるから、身體のいたむやうな

ことは無い、どんなに疲れてゐても、一夜明ければ、清新な元氣が身體中に滿ち溢れてゐるのである。

思ひわづらふことの多い日は、寢てもしんから寢付かれぬ。夢にうつゝに、心配事が胸を去來して、幾らも安眠出來ずに夜が明ける。

その朝は又何といふ不愉快さであらう。頭は鉛のやうに重い、身體はぬけるやうにだるい。心が、人間思案に占領されてゐたので、神樣の御入込みがなかつた。從つて身體は神樣に修繕して貰つてゐないのである。

昔から、寢る兒は育つと云はれてゐるが、如何にも眞理である。

『心一つが我の理』として、心使ひの自由を許されてゐる人間であるけれども、この心使ひから、我身思案を取り除けることを勉强すれば、詰り、心が人間思案を離れて大自然と同化する時、身上貸主の神樣が、まことに自由用自在の御守護をして下さる

のであると信ずる。

切れ味

よく斬れさうな刀を見ると誰しも恐ろしい。肌に冷水を浴びた思ひがする。だが、我身思案を恐ろしがる人は一人もゐない。我身思案卽人生とまで思ひ込んでゐる人さへもある。

知らぬが佛とはよく云ふたもの、我身思案の切れ味を知らないのである。

私が罪を受けて初めて監獄に入る。惡い奴だが、氣の毒な處もあるといふて、面會にも來て下さる。出獄の日には見舞ひにも來て下さる。然し二度目になると、同情が寄つて來ない。親子兄弟の間でも、又かと云はれるやうになつて、今度は、面會も無いし、差入れも減る。三度、四度となるにつれて、たうとう私は、捨てられてしまふ。一人ぽつちになつてしまふのである。

私のまはりからは、人の同情も切れる、物質も切れる、——神樣の御惠みも切れる、切れ物づくめの中に立つて、行くに行けぬやうになつて、この身一つを持て餘すに至るのである。

御教祖は十數回、警察や監獄に御苦勞下された。一回は一回と、出迎へ人が增してゆくばかりである。明治十九年、奈良へ御苦勞になつた時には、出迎へ人が奈良、丹波市間のあの上街道を埋め、數百臺の人力車が行進したと聞くのである。

御教祖樣を比較に持ち出して、恐れ多い事ではあるが、御教祖樣の場合は、我が身どうなつても世界の子供を助け度いと思召される助け一條である。私の場合は人の目を眩まして利益を得よう、なるべく澤山取つてやらうといふ、最惡の我身思案の凝り固りである。

人を生かす助け一條と

人を殺す我身思案

一は限り無く伸び榮え、一は限り無く亡びてゆくのである。

我身思案は、血縁のつながりも切る、金も切る、物も切る、何でも切る。これ程よく切れる兇器を、人々は何故おそろしいと思はないのであらう。却つて、ふところに抱いてゐる人さへあるやうである。

『このお多福め……』

と夫がのゝしる。

『何を、この甲斐性なし……』

と妻が返す、犬も喰はない夫婦喧嘩である。

『このお多福め……』

『……』

何とか云ひ返し度い我身思案を鞘に納めて、だまつて、ニッコリ笑つて居れば喧嘩にならぬ。あばたもエクボと云ふ。妻のたつた一つのたんのうから、樂しい夫婦愛が繋がれるのである。

これは日常茶飯事の一例にすぎない。とりたてゝ云ふ程の事でもないかも知れぬ。この何でもないと思はれる事の眞劍な勉强が、日々の暮しを明るくもし、暗くもする鍵であることを思ふならば、これは眞面目に考へねばならぬ問題である。

孝行は人事百般の基である。孝行する人は出世する。商賣が繁昌する。家族も榮える。孝行は物凄く、つなぐ力を持つてゐる。何故だらうと考へるまでもない。孝行は子が親に對して、微塵も我身思案の無い仕へ方だからである。

或る村に有名な孝行息子がゐた。その評判が近在は云ふまでもない、遠く他國にまでも傳はつた。餘り評判が高いので、わざ〳〵遠い處から彼を訪ねていつた奇篤者があつた。

村に入つて尋ねると、孝行息子の家はすぐに見付かつた。丁度、夕方で、噂の主はまだ野良から歸つて來ないといふ、母親が一人で留守番をしてゐた。

暫く待つてゐると、鍬をかついで歸つて來た。——有名な孝行息子だ、さあこれから、母親にどんな仕へ方をするのであらうと、彼の態度に全神經を尖らした。

見てゐると息子は『只今！』といつて椽に腰をかける。『今、水を持つてゆくよ』と母親の聲。やがて桶を重さうにさげて母親が息子の前に出る。そして息子の足を洗つてやるのである。息子は平氣な顏で母親に洗はしてゐるのだつた。

この親不孝め、これが孝行者か、はる〳〵訪ねて來た甲斐が何處にある。內心、穩

やかではない。

歸り途、村人を捉まへて聞いた。

『母親に足を洗はして平氣な顏をしてゐるやうな奴が、何が日本一の孝行者だ』

『それはあんたの見方が惡い。あの人は、もうこれで二十幾年、一度として、親の言葉に逆らつたことがないのですよ、このまねが出來ますか』

譯を聞いて、その人は成程と感心した。

親から切れたら、根の無い花と同樣である。實も結ばずに亡びてしまふだけである。我身思案を放して親に添ひ切る。これ程たしかなものは無い。

近頃、親の不足を云ふ人が多い、大抵の人はそれを口にする。そしてこの種の人に限つて、お助けが上らないといふ人である。敎會が思ふやうにゆかぬ、と云ふ人であ

る。

たとへ、目に一文字の無いお婆さんが親であつても、お話も上手に出來ない爺さんが親であつても、その聲を頼りに歩むならば、必ずや神樣がいゝやうにお連れ通し下さるものであると信ずるのである。又、かういふ親に添ふてゆくその狀態が素晴らしい理の躍り出る條件にはまり込んでゐるのではなからうか。我身思案を放して考へるなら、これ程樂しい境地はない筈である。

盲目助け

金が欲しいと思ふ人は、金に目がくらんで、金以外のものは何も見えなくなつてしまふ。『ほしい』のかたまりは、やがて『目のホシ』となつて現れる。何も見えなくなつてしまふのである。

我身思案に捉はれると、おみちが判らなくなる。おたすけがわからなくなる。眞の

たすけが上らない。

主人がバクチ道樂で、女房はどんなに苦しんでゐたか知れない家庭があつた。その女房が、おみちの話を聞くやうになり、主人のバクチを止める方法は、報恩より外にないとさとされた。

それから細い暮しの中から、心一杯、精一杯の報恩が續けられたのである。

或日、その家をいつものやうに助け人衆が訪れると、

『先生、今日はこれをお持ち歸り願ひます』

といふて、米櫃をさらつて僅かばかりのお米を風呂敷に包んだのである。

助け人はその米を持つて歸る途々、フト人間心が湧いた。

〃明日の朝は何を食べるのであらう。いや、それよりも、今晩をどうして過すのであ

らう。これを貰つて歸るのは餘り酷すぎたかしら〃

無理も無い思案であつた。

その翌朝になると、助け人の左手に小さい水ぶくれが出來た。別に氣にも止めずにゐたが、夕方には、手一杯にひろがつたのである。そこで私に、おさとしを受けに來た。

『お前は、人情助けをしないか、人情助けは無方針だぜ』

私は一言かう言つた。助け人は、前夜の人間思案のおわびして、その夜中に、水ぶくれは御守護頂いたのである。

翌日、再びその家を訪ねると、

『先生がお歸りになると、間もなく、二升のお米をさづかりました』

と、嬉しさうに云つてゐたのであつた。

『私よりも、あの奥さんの方が偉い、神様の理をよく摑んでいらつしやる。助け人ともあらうものが、つまらぬ情に流されて、神様の支配を疑つた事はまことに申譯なかつた』

と、しみ〴〵私にさんげした。

お助けに、我身思案と人情とは絶對禁物である。助け人の仕事は、先方に神様が出て働いて下さるやうに準備することである。

かう云つたら氣を惡くせんだらうか

さう度々おつくしが云ひにくい、あの家も世帶の苦しいうちだ

これは人情の思案である、理の思案ではない。我身思案であつて、神一條ではないのである。これでは、斷じて神様は働いて下さらぬ、神様から突き放されて、終には

收拾のつかぬやうな事になつてしまふ。

小僧が主人の命令で使ひに出る。初めからどうも氣分のすゝまぬ使ひである。それは主人の言葉が餘り激しくて、とても、その通り先方に取次げないからである。そこで、途々どう云はうかと思案しながら行く。さうして先方には、たうとう自分の顔が立つやうに、主人の言葉を枉げて傳へたとする。

店に歸ると、早速主人は尋ねた。

『オイ、俺の云ふた通りにしたか』

『いゝえ、實はそれでは先方にも餘りお氣の毒ですから、かう申しました……』

『馬鹿、誰がそんな事を命令した。俺は責任もたぬ。お前の勝手にしろ』

主人に突き放された小僧はみじめである。この小僧には、再び重大な用は云ひ付けられない事になるのである。

かういふ事がお助けの場合にありはしないだらうかと一考する。

病人を前にして、助け人は神の名代として神の言葉を取次ぐのである。神樣のお言葉をそのまゝに取次げば、後は神樣が責任を持つて働いて下さるのである。

その人が食へるだらうか、やつて行けるだらうかと、心配する必要はない。衣食住は神樣の支配下にあることである。餘分なおせつかいは全く無用である。

神樣がしてやらうと考へてゐられるのを、私がしてやりますと横取りするから、困つた事情になるのである。

御助けが上らない

御奉公が思ふやうにゆかない

と云はれる聲の裏には、私は必ず、この、神樣の面目をつぶして自分の顔を立てよ

うとする我身思案が横たはつてゐるものと考へる。

不自由なき樣にしてやらう、神の心にもたれつけと仰せられてゐるのである。

不自由なき樣にしてやらう、我身思案にもたれつけとは仰せになつてゐない。

蒔き付けの春

世の中には貰ひ度い人が多い。

ほめてもらひたい人

可愛がつてもらひたい人

物をもらひたい人

我々は、この人々に、今日は何でも彼でも貸し付けておく可き旬であると思ふ。言

葉でも、心でも、物でも、一切をだまつて説明なしで貸し付けておく旬である。

親には吾子の缺點がわからない。我子は無條件に良いのである。たとへ惡くなつても、

『うちの子供には決してそんな惡いところがありませなんだ、これは友達が惡かつたからです』

と、惡い處は人の故爲にしてしまひ、我子はあくまでもよいのである。

教會の擔任者としては、百人なり千人なりの親である。

『親と云ふものは子供に目がないのだよ。目の中に入れても痛くない程可愛いと云ふではないか、役員さんや信徒に不足をするな、大きく抱きかゝへて行つてくれ。

『子供が親を慕ふ情は絶對のものである。幾十年の間、お父さん、お母さんと慕はれ

る理は何處にあるのであらうか。子供を育て上げる幾年かの間、うちの子供は賢い子供、うちの子供はよい子供と、まるきり抱きかゝへて通つたこの眞實一路の親心が慕はれる理となるのである。

『すべてを許して、ほめることしか知らない親心、これだよ。神樣は阿呆に手柄をさせたいと仰せられてゐる。人の缺點を見ない、人の缺點をそのまゝ許してゐる人を、この世界では阿呆と云ふが、この阿呆に人は近づきやすいのである。賢い、トゲ〳〵した人には近づきにくい。

と、私はいつも家内に云ふてゐるのである。

御教祖五十年のひながたは、一面には、『たんのう』一條の道である。人類二十億の子供に代つて、子供の爲めに『たんのう』一條であらゆる御苦勞を歩まれたのである。

かくて、吾々に與へられたのが、今日の安らかな道である。險しい道は、既に御教祖樣が先に身代りとなつて歩んでおいて下されたのである。

たんのうは繼ぐ理、ふやす理

まことに、親樣五十年の素晴らしい『たんのう』から、今日の教團が生れ、親樣御一人から、八百萬と算せらるゝ道の子が生れたのである。

子供の缺點をあら立てるやうでは決して親の資格はない。

教會の榮える、榮えないは、擔任者の、明るいたんのうに依る處が大きいのである。

第六講　命懸け

ダイヤの主

或日、奉賽箱を開けると、ダイヤの指輪が出て來た。

私は胸の中で、ダイヤの指輪をもつてゐさうな人を次々に思ひ出して、その人々がこゝ數日中に、參拜に見えなかつたかと聞いてみたが、私の見當をつけた人は誰も來てはゐなかつた。結局、誰がお供へしたか判らなくなつてしまつた。

するとその翌日、かさ高い風呂敷包みを持つて運んで來た、四十前後の、もう一つ風采の上らぬ婦人がある。

『これを神樣にお供へして下さい』

さういつて、婦人は風呂敷包みを差し出した。中を見ると、時代こそ古いが、どれもこれも絹物づくめの立派なものばかりである。私は意外に思つた。その婦人の常日頃の服裝から考へて、まさかこんな立派なものを持つてゐやうとは、夢思はなかつたからである。

婦人は語る。

『私がまだ若い頃です、母親が熱心な信仰をいたしましたが、その甲斐もなく私が醫者の手放れとなつた事がございます。その時、お母さまは——妾はもう年が年ですからこの身上はお返し致します、その代り、この子供の身上をお助け下さいませ。まだ年も若い、これから妾の倍も三倍もの御奉公をさせますから——とお願ひしますと、それから私の身上は掌を返すやうに御守護になつて、母は間もなく出直しいたしま

した。

『それからもう二十年も餘りになります。私は御守護を頂いて今日の日を迎へましたが、今年は恰度、亡き母と同年です。お母さまもこの年で出直されたのであり、まして、私は神様への御奉公を誓つてお助け頂いたのですから、お母さまの靈に對してもこのまゝでは申譯ない、今日限り死んだものとして御奉公さして頂かうと精神定め致しました。

婦人の話は眞劍そのもの、聞く私の胸にヒシ〳〵と迫るものがあつた。

『死んだ私には着物も何もいりません、全てをお返し申しまして、一生懸命にやらして頂きます』

ダイヤの指輪も、その婦人の納消であつた。

婦人の活動は果せる哉、もの目覺ましいものがあつた。婦人のまはりには、旬の御用の、別席者が、ドン〳〵と生れた。婦人の眞劍に接した者は、何人も婦人の言葉に共鳴しないではをられなかつたのである。

道は命懸け眞劍である。

死んだ己れとなつての活動——生きた己れを捨てゝ、神様にさゝげきつた己れとして、よし火の棒を握らされても悠然として握つてゐられるやうな姿でなければ、本物の命懸けではないのである。

命懸けの覺悟は出來てゐても、心と行ひとがそれに添うてゐない人が多い。

思ふに、その婦人も命のない命の人であつた。既に無い一命を神様に引き伸ばして頂いてお借り申してゐるのである。この婦人ばかりではなく、おみちの用木の大部分は、この、命の無い命の所有者である。

無い一命であるから、神様の御恩報じに命懸けの御奉公を御約束申してゐるのである。だが、この命の懸け方に、私は、本物と嘘とを見るのである。

三人の姿

三人のお助け人がある。皆一様に命懸け眞劍である。然し、三人が三人とも、同様の御守護を頂かなかつた。出發點は同様であつたが、行き着く處は皆違つてゐた。

第一の人。

赤い大きい夕陽が野末に落ちかゝつてゐる。彼は、鍬を投げ捨てゝ合掌した。

『命懸けでございます、眞劍でございます』

夕陽の中に祈るその姿には、たしかに命懸け眞劍の氣魄があふれてゐた。

やがて彼は再び鍬を振り上げた。金色の夕日影を全身に浴びて、感激の作業をつゞけた。夜になつた。滿天の星を仰いで、彼はなほも作業を續けてゐた。靜かな廣野

に、鍬の音は夜つぴいて止まなかつた。

かうして彼は夕陽を送り朝日を迎へた。雨に濡れる日もあつた。風に吹かれる日もあつた。髪は伸び亂れ、頰は日燒けて落ちくぼみ、あばらの骨も露はになつてゐたが、彼は休まうとは思はなかつた。彼の頭には衣食住はなかつた。衣食住を超越した超人間の力を盡して、この野邊にたとへいたましい骸となり果てやうとも『眞實の泉』を掘り當てたいと願つてゐた。

彼の頭には、唯、滾々と湧き上る清冽な泉の姿が描かれてゐた——御教祖の雛形の一節が命懸けの憬れの的となつてゐた。

御教祖親様と春日神社の一夜。

あづかり兒足達照之丞の身上平癒を祈られる親様の御聲が彼の耳に響いてゐる。

『吾子二人の命を召して下されましても、照之丞をお助け下さいませ。それでも尙不

ございますれば、この身を召して下さいましても……』

彼は照之丞の奇蹟的霊救に續く中山家の不幸を思ふ。……親様の御願ひ遊ばされた通り、お二人の幼い命が相次いで消えていつた。この現實を眺められて親様は何と思召したであらうか。彼は我が悟りを我が胸に說き聞かすのである。

〃親様は人類の親である。御魂の因緣から、神のお社とおなり遊ばされたのである。その親様の御雛形は、そこに何等の人情的の註釋を加へる餘地はない。雛形は雛形として、そのまゝが尊いのである。

だが、私は、この照之丞の場合を、かう考へるのだ。さうして、それを私自身のはげましとしてゐるのだ。

お二人の子供が神様に召されて行かれたのを御覽になつて、親様は、神様は願ひ通を聞き屆けられるものと、思召したであらう。さうして、御自分の命も、やがては

神様に呼び寄せられることを御自覺なすつたであらう。

親様の『今日一日を生涯の心として』の境地はこゝから始まる。明日は神様に召される命と、今日一日を生涯として眞劍にお歩み下された。その日が暮れて行けば、一日の日の借物に、如何ばかり眞劍な感謝を捧げられたであらう。朝が來れば、更に又、大きい感激を覺えられたことであらう。かうして、親様の一日々々は、眞實一路命懸け眞劍一路であつたのだ。

見よ、親様のまはりにまき起つた奇蹟的霊救の數々を!! 親様は、照之丞のお助けを第一歩として、あの時に『萬人助け』の眞實の泉を掬されたのではないか。それ以來、眞實の泉は汲めども盡きず、流れ溢れて、こゝに世界萬人助けの實をおあげになつたのだ……〃

彼はかう思ふのである。そして、彼の目指すのも、この眞實の泉を、掘り當てよう

とするにあるのである。

日は流れた。月も變つた。然し、今彼の足下には、大きな岩が現れてゐる。小さい鍬一つ、か弱い人間力ではどうする術もない、それは大きい難關である。今は、氣力盡き果てゝ、鍬を抱いて横たはつてゐた。

『そこだ頑張れ、この最後の頑張りが生命ではないか』

といふ囁きも聞く。

『もう駄目だ、この身、この力でどうしてあの岩を破れるものか』

と否定する。彼は遂に起たなかつた。淋しくたほれていつた。

第二の人。

第二の彼は處を變へて掘つた。悲壯な念願とその氣魄は決して第一の彼には劣らなかつた。前者の轍は踏まずと、希望に燃えてゐた。かくて數十日、嵐に雪になやまされながらも血みどろの努力をつゞけて、第一の彼と同樣の岩に行き當つた。

岩は幾度打つても鍬をはね返すばかりである。彼も亦、精魂つき果てゝたほれた。彼はやせこけたほゝに涙を流してゐた。然し、再び鍬を取る氣力を失つてゐた。汗と土に塗れた面上には、總てを斷念する色が哀れにも漂ふてゐるのである。

かうしてこの廣野は幾人かの勇士を迎へたが、遂に只一人の凱歌をも聞かず、徒らに幾つもの穴が殘されたばかりで年月は流れた。

第三の人。

眞冬の或る日、この野は又も新しい一人を迎へた。彼は幾つもの敗慘の姿を見た。そして、幾つもの穴ろを見た。然し、彼はおめもおそれも無く、この神秘の野に第何

番目かの穴を掘らうとするのであつた。

彼は既に先人の失敗の原因を知つてゐた。

『俺は事半ばでたほれるやうな意氣地なしではないぞ』

と叫んだ。彼は決死の鍬を握つた。彼は土にまみれ、雪にまみれ、死物狂ひで掘つていつた。

或る夜、彼は月を仰いで嘯く。

『命懸けだ、眞劍だ、今この努力をつゞけてゐる俺が死んでゐるのである。死んでゐる俺に何の慾があらうぞ。今のこの俺は、決して人間の俺ではないのだ。智恵も力も月日樣の貸物、俺は全てを貸主たる神樣にお返しゝてゐる。こゝにあるこの俺の存在は、神樣が入込んで働いてゐて下さるのではないか。人間が掘つてゐるのではないぞ、人間力で掘つてゐるのではないぞ!!』

かくて幾十日、水火の苦行を浴びて精進した。嵐の夜が明けて、或る朗かな朝であつた。嵐は彼の肉體を石ころのやうに弄んだ。實際彼は、昨夜は幾度か大地に叩きつけられた。車軸の雨にうたれ、暴風に吹かれ、……然し、彼は吹き倒されても、ムクくと起き上つた。そして、休むことなく鍬を打ち下すのであつた。

人間ならば、今朝はもう起てる譯はないのである。彼は思ふ。

『俺ではないのだぞ、この働いてゐる手を見よ、足を見よ、神樣ぢやないか。人間心を去れ、眞實神にもたれよ』

その時だ。ガチッ!! と、鍬が岩に當つた衝撃が彼の全身に應へた。彼は足下を見た。岩石が現れてゐるのである。彼は危く、吐息をつかうとした時、

『神が掘るのだ、お前が掘るのではないぞ!!』

と、彼は脊をドンと衝かれた。

『岩が何だ、石が何だ……神様がなさるのではないか』

彼は更に力を絞つて鍬を打ち下した。神名を唱へつゝ、一鍬々々に精魂をこめた。かうして幾度か……その幾度目かを打ち下した機に力が抜けて前によろめいた彼の面に、サッと冷たい水が飛びかゝつた。

『あゝ、泉だ、泉だ』

彼は深い穴底に手をふり上げて天に叫んだ。彼の凱歌は、高らかに廣野に響き渡つた。

まことに一死を以てして彼は遂に『眞實の泉』を探し得た。彼には手段も方法もなかつた。只死があつたばかりである。然し、この泉は、一度掘りあてれば、汲めども盡きず湧き溢れるのである。彼はこゝに萬人助けの源を得たのである。

二月の水風呂

私は女中に導かれて病室に入つた。

『お靜かに願ひます。氣をつけて下さい』

醫者の一人がヂロッと私を見て、小さい叱言を投げ付けた。

病床には博士三人と學士一人とが、つきにつき切り、今は僅かに最後の息をのばしてゐるに過ぎない。部屋中には、厚い毛布が幾枚も敷き重ねられてゐて、絶對安靜を必要とする病人の爲めに、人の足音も忍ばれてゐた。少しの震動でも身に應へて心臟が止まつてしまふのである。

醫者同志は互に目配せをして、一人が注射針を持つと、やせおとろへた蒼白い肌に差し込むのである。私は、このいたましい姿を見るに忍びない。せめて一言なりとも神様のお話を早く取次ぎたいと思ふが、それをやつてのける勇氣が出て來ないのである。

醫者は私の存在などには目もくれず、冷靜に構へてゐるし、その他の人々も、最初目禮を交したきりで、それも〃お母さんの物好きがくだらない天理教などを呼び寄せて……ふん、天理教がこの際何の役にたつものか〃と云つたやうな眼指しで冷たい視線を投げたばかり、その後は素知らぬ振りで只病人の樣子を看守つてゐるだけであつた。

私のまはりには、かうして五人も六人もの人はゐたけれども、私は孤獨であつた。私を招じたのは、病人の母親であるが、その母親もこの部屋の空氣に押し負かされて、私に氣を配る譯にもゆかなかつた。

私は勇を鼓してこの部屋の靜かな空氣をゆすぶつた。

『身上は吾々にとつては借物、神樣からの貸物ですからねー』

然しそれはやつとの事であつた、極めて小聲につぶやいたにすぎない。母親一人は

うなづいてゐたけれども、後の人々は、譯の判らぬことを云ふ奴と、私の顏を見るだけであつた。

病人は深い昏睡を續けてゐた。姙娠四ケ月の身に、流行性感冒、肺炎、肺結核、そして、腹膜と、四つもの大病に、か弱い肉體を切りさいなまれてゐるのである。

私は私の立場を考へた。人々に押されてゐる弱い情けない神の名代としての私の立場を見直した。

——この家に神の名代として助け人が侍ること、これで二回目である。前回は、この病人の姉の場合で、その時は御守護頂けなかつた。たとへ、私がそのお助けに當つたのではないにしても、おみちの大局から考へれば私が來たのも同樣である。今度は、どんなことがあつても、このまゝ病人の出直しに侍るといふやうなことではならぬ。

靜かな病室の雰圍氣に浸つて、そして、四面楚歌の中に坐つて、私は次第に、心の落着きを見出した。魂の冴えを覺えた。

私は、胸の中で靜かにおぢばに合掌した。

〃私はこのまゝ果てましても結構です。道と、神樣の御名とさへ表に現はさして頂きますればそれで結構でございます。餘りにも因緣の深い、はしたない命ではございませうが、何卒このお願ひとこの命とをおとりかへ下さいませ〃

命懸けのお助けにも二樣の姿を見る。

命懸けでやつてゐますと云ひ乍ら、人間心を使うてゐる場合と、根こそぎ人間心から離れてゐる場合とである。

命懸けとは、この借物の身上を、神樣におまかせしてしまふことである。神樣のなさるがまゝにまかせて、何等、人間心を使はないことである。

助かるかしら？　助からぬかしら？

若し助からねば私は一體どうしよう？

などゝ、案じ心が湧いて來るのは、決して命懸けになつてゐないのである。命懸けの境地には、さうした人間的な不安は微塵もない。純白無垢の助け一條の白紙の狀態である。

憂鬱を蹴飛ばして、限りなき明朗の世界である。不安なおびえた顏をしながら、『私は今命懸けになつてゐます』と云ふ人もあるが、それはウソである。それでは、決して命は懸つてゐないのである。

病室を起つて私は湯殿に案内してもらつた。湯槽に水をはつてもらつた。二月の空

はさつ青に澄みきつてゐた。水に濡れたタオルは凍るやうな冷たさに光つてゐた。私は、その水風呂に浸つた。十分間餘り冥目合掌した。

風呂から上つて病室に入つた私、今は人々に押し負かされてはゐなかつた。人間闘としては、或は、その人々に立ち向ふやうな勇氣はなかつたかも知れない、恐らくなかつたであらう。然し、今は『我』のない私である。私は高らかにおさづけを取次いだ。そして、再び水風呂に浸つた。

二度のおさづけまでは、手の動きも自由ではあつたけれども、三度目には、手の自由は殆んど利かなかつた。魂だけは益々冴え返り、素晴らしく躍つてゐるのが私にも感じられた。

ダイヤの行方

その翌日病室に入ると、四人の醫者と母親とが何事か相談をしてをられた。

『何分本人は姙娠中で普通の身體ではありません。このまゝ日を重ねても只衰弱を加へるばかりです。この際子供をおろして了はねばとても助かる道はないと思ふのですが、お母さんには御異存がありますか』

母親は默して語られない。私はツト横から口を挿んだ。

『お腹の子供は一體、死んでゐるのですか、それとも生きてゐるのですか』

『達者です』

私は今度は母親に向いて云つた。

『子供は達者ださうですよ。お腹の子供とこの病氣とは何も關係がないのですから、無理に下す必要はありますまい。それに、母體はあゝして衰弱しきつてゐるのですから、そんな大手術をすれば本人を殺すのも同樣ではありませんか、そんな馬鹿な事はお止しなさい』

『ぢや、君は僕達に楯つかうと云ふのか』

お醫者達も默つてゐなかつた。

『そんな意味ぢやありません。しかし、貴方達は子を下して間違ひなく助かるといふ自信がおありになりますか』

『この場合はそんな問題ではないのだ、さうすることが醫者として施す最後の手段なんです、吾々としては全力をつくしてやつてゐる、君の干渉は受けない』

『そんな頼りない人にこの大切な人をおまかせしておく譯にはゆきません。私が間違ひなく引受けます、もう注射も打たないでおいて下さい、貴方達は何も構つて下さるな』

私は子供を下してしまへば、それで母子二人の命はしまひだと信じてゐた。だが、兩方の云ひ分の板挟みになられた母親は、その判斷に迷はれてゐた。そこで私は母親

に一つの提言をした。

『たゞ一つ私の願ひを聞いて下さい。こゝへもう一人産婦人科醫を呼んで、子供を出すのが至當か、それとも出さぬが至當か確かめて頂き度いのです』

母親は救はれたやうに、私の言葉に贊成された。そして待つ程も無く、大阪緒方病院の院長が來診に來られたのである。

私は席を外して二階に上つた。

床の間にローソク三本立てゝ親神樣にお願ひした。

『どうぞこの博士をして、子供を出してはいけないと云はしめて下さい』

博士の言葉一つが、このお助けがすゝむかすゝまぬかの運命の鍵である。私は夢心地になつてお祈りしてゐた。やがて、博士の歸るらしい車の音に、私は轉がる樣にして下へ降りた。ローソクの火を消すのも忘れて——。

『先生はどう仰せになりました』

『先生！　貴方の仰有る通り子供は出すなとの事です』

かう云ふ母親の顔にも安心の色が見えた。私も亦〃これで助かつた!!〃と、心に叫んだ。

三日目の朝は、母親がいそ〳〵と出迎へられた。そして挨拶よりも先に、

『先生、おかげ様ですつかり快いのですよ、今朝からは牛乳とおも湯を少しばかり頂けるやうになりました』

と云はれる。喜びは、この屋敷中に溢れてゐた。私は、母親に、勢ひ切つて、お話を取次いでゐた。實際、この日こそは、私がこゝへ來てから初めて、思ふ存分の教理を取次げる日であつたのである。

その時、下男が入つて來た。

『奥様、どうしても見當りませんが』

『お前、よく探してくれましたか』

『ハイ、畑へ汲み出して一生懸命にさがしましたけれども——』

『無い筈はないのだがね』

下男と母親との問答は私に解せない。

『一體どうなさつたのですか』

『先日、あの娘が喀血いたしましてね、それを自分の兩手に受けました。それで洗面器で手を洗はしたのですが、何分あの通りに痩せおとろへてをりますので、指してゐたダイヤの指輪が抜け落ちたのでせうね、その時は本人も氣が付かなかつたのですが、今朝になつて氣が付いたのです。それで、今、洗面器の水を捨てた便所を探さし

てゐるのですけれど――確かにあの時に落したのに違ひないのですから、無ければならん筈ですが――』

『もう一度、よく探しておいて頂戴――』

下男が下つていつた後で、私は、靜かに、

『それは奥樣、ないのが當然ですよ。神樣がおとり上げになつたのですから……よく事情を考へて下さい。娘さんは既に他所に嫁いでゐる人でこの家の人ではないでせう。只、御主人が娘婿を引立てようとなさる關係から、この屋敷に同居させてゐなさるのではありませんか。それに今度の病氣についても、一切の費用は全部こちらから出されて、先方は殆んど無關係の有樣になつてをります。人間相互の勘定では、これでよいかもわかりませんが、神樣の勘定ではそのまゝ濟まされません。神樣はこの恩を、病人から納消さゝれたのですよ、ダイヤは失ふたのではなくして、神樣がお取り

上げになつて納消さして下さつたのですから、喜ばねばなりませんよ。神樣は、もうそこまでお心を配つてゐて下さるのぢやありませんか。もう大丈夫、これで助かるのです』

『然し、先生、神樣は隨分不經濟なことをなさいますね』

『それでは申しませう。貴女は昨夜、大丸が燒けたのを御存じでせう。神樣が不經濟なことを遊ばされるなら、決して一夜の中に二百八十萬圓も燒かれる譯はない。人間が不經濟と思ふのは、物質がこの世界からなくなつたからでせう。こゝが考へ處で、おみちの貸物借物の理から思案すれば、何んでもない事なんです。

『人間は失つたと思ひますが、神樣の方から御覽になれば同じ事です。それは、この世界の何處かにあるので、神樣のふところには何の狂ひもありません。

『物や金が自分のものであると思ふならば、なくなつたことになります。が、全ては

神様からの借物で、所有權は神様にあるのですよ。甲の物が乙の物になつたとしても、それは人間相互關係の移動で、神様には同じことです。

『只、我々が因縁に迫つて手放したのに過ぎないのです。これで結構なお仕込みを頂戴し、なほその上に、因縁までも切つて頂けるのですもの、吾々としては、どんなに喜んでも喜び切れないではありませんか。

『又、これを科學的に説明しても同じ結果になります。今假に、着物が跡形もなく燒けたといたしませう。形はなくなりましたけれども、その着物は氣體と灰とに變化してゐるだけであります。物質の本體はやはりこの世界にあるのであつて、宇宙を司どられる神様のふところには何も損害はない筈であります。

母親も病人も得心せられた。心の成人はやがて身上の御守護となつて現れた。それ

から六日目には座談が出來るやうになり、一ヶ月後には全快し、やがて月滿ちて安産せられた。

然しこのおたすけに當つて、私は一つの話題を殘した。それは第一日の日に二階の床の間に、ローソクを消し忘れて高價な床板を臺無しにしてしまつたことである。その時の私はよつぽどあわてゝゐたのであらう。これはいつまでも笑ひ咄の種となつてこの家の人と顔を合はす度に語られてゐる。

借物の眞髓

私は最初神様にお約束申し上げた通り、みちと神様とを表に出し得たのである。その爲に、この一命とのとり換へをしてゐるのである。私は食事もとらなかつた、風呂にも入らなかつた。只、つとめて〳〵つとめ拔き、そのまゝ、神様に迎へ取られる日を待つてゐた。遊んでその日を待つてゐては申譯ないと思つた。毎日々々、おたすけ

に歩いた、フラ／＼する足を踏みこらへて歩いてゐた。

その時、東本初代會長が大阪に來られた。本阪宣教所では一同揃うてお迎へ申した。私も亦その中の一人としてまじつてゐた。

二階の會長の部屋へ挨拶に行くのに、私はやつとの思ひで階段を上つた。そして匐ふやうにして會長の前に出た。

『關さん、やつれてゐますね、御意見ですか』

と、ものやさしい聲。私は胸が一杯で何も云へなかつた。側にゐた人が私に代つて云つて下さつた。

『關先生はこの頃命をかけてのおたすけをなさつたのです、それで、神樣への御約束通り絶食してゐなさいます——』

會長の兩眼から何時か涙が流れてゐた。

『私も今日の日までに隨分さうした日がありました、みちを通らして頂くには、それだけの精神がなければ本當ではありません。私も幾度、投げ出した命か知れませんのに、今日かうしてお連れ通し頂いてをります。その節を重ねる度に、益々澤山な人を助けさして頂けるやうにして頂いてをります。關さん、こゝが御慈悲な親樣の御守護ですよ。この御恩を忘れないやうに、つとめさして頂くのですよ。

『關さんのその精神は結構ですが、借物をそんなにいためることは申譯ありませんから御飯を頂きなさい。私から神樣にお願ひして、そのお許しを頂きませう。さうして今日からはより一層、助け一條のためにその精神でお働きなさい。くれ〳〵も神樣の御恩を忘れてはなりませんよ。

私には會長の一言々々が腸に滲み入つた。

今もなほ私はしみ〴〵と思ふ。

たゞの一度でいゝ、命を投げうつてのお助けをさして頂くのだ。本當に死を期してのたすけ、全ての人間慾を放れての助け、こゝに天直接に交渉が出來る眞實境が開けるのである。

『眞實々々』と『眞實』とは、輕々しく口で云はれるやうなものではない。己れの心をどん底、虛無におとし切つて、そこに初めて眞實が生れるのである。然し、そこに行くまでが仲々、私のやうな魂の者には容易な業ではない。眞實の泉の一歩手前で行き當つてしまふのである。

命懸けと云ふ、決死と云ふ、借物の身上を、そんなに粗末にしてもいゝのかと云ふ人があるかも知れない。そんな事をして借物の理がわかつてゐるのかと云ふ人もあるかも知れない。

だが、命いらぬ、といふて初めて借物の眞髓に徹することが出來るのである。命いらぬといふても腹を斬るのでもない、水に飛び込まうといふのでもない。

いかなる苦しい中も、立つ瀬のない中も、ぢり〴〵と神樣目標にすゝむ、これが決死の活動である。この道中を通りぬけてこそ、萬づ借物の眞髓をつかみ得るのである

貧乏も難儀も苦勞も、皆、吾々用木には只一つの財產である。この中を、ぢり〴〵と一歩は一歩と神樣に向つて進んでゆくだけの神の子としての勇氣がなければならない。

鐵は金よりも價が安い。その價の安い鐵も、火で燒かれ、水に攻められ、人に打たれて、こゝに三尺の秋水紫光を放つて、金以上の値が出るのではないか。

愚鈍の鐵も、かうして、火水と人に攻められて光を放つのである。云ひ換へれば、火水卽ち月日樣と人とにもまれてこそ價値が生ずるのである。鐵にも等しい私の魂

である。月日に攻められ、人に攻められなかつたならば果して何時の日に輝くのであらう。

私は今日の道は既に或る水準に達してゐると思ふ。然し、こゝに一歩の努力――根を掘り切る努力が無ければならないと思ふ。

おみちの用木全部が、今日まで、雨の日も風の日も通り抜けて、今、最後の大障碍に行き當つてゐるのである。眞實の泉は、こゝ一つをしきつて掘り切るところから生れて來るのである、この障碍に負けてゐては、遂に眞實の泉を掘り當てることなく果てゝしまふのである。

通つた理だけが、心に浮ぶものであり、見えて來るものである。今一歩の掘下げなく、現在のまゝであるならば、浮ぶものも、見えるものも、今日までと同樣である、それ以上の新しい、鮮やかな理を見ることは出來ぬ。

新しい、素晴らしい理を見たいと萬人は願ふ。その爲めには、こゝの一歩を強く掘り下げねばならないのである。

このねへをしんぢつほりた事ならば　ま事たのもしみちになるのに

と仰せられてゐる。

昧ひ盡きるところなきお言葉と覺える。

第七講　順序

窮まる道

自動車も走る、電車も走る――然も自動車は甲蟲の甲羅を並べたやうに走つてゐる。この阪神國道の交通量は一日にどのくらゐあるのか知らないが、私はたゞその偉觀にうたれるのである。

私も今その中に伍して疾驅してゐる。

〃田舍道ならこの何分の一の自動車を通し得るであらう〃

〃自動車一臺で道一ぱいになるのではないか〃

〃畦道なら、人一人通るのが精一杯だ〃

〃御覽よ、この素晴らしい道を、一日に何千臺の自動車が通るのか知らんが、ビクともしてゐないぜ〃

〃お前も早うこんな道をつけるんだね。お前も、昔と比べると、少しは大きな道になつたけれども、まだ〳〵ものゝ數ぢやないよ〃

〃この道はね、神戸と大阪とを繫ぐ生命線だ、お前と上級の道は一體どんな樣子か。今といへば今、阪神間急行運搬といふやうに、素早く運べるか〃

〃御覽、この道には、荷を滿載したトラックがあれあの通り澤山通るよ。上級教會へ、どんな大きな荷物でも故障なしに運び得るやうな道を付けるんだね〃

子供のやうな事を考へた。然し、私は、たまらない程うれしくなるのである。

私自身の歩んだ昔の道と、今の道とを比べる時、もとより、今の道とてさゝやかな

ものでは、云ふに足りないかも知れないが、嬉しさ、有難さで胸一杯になるのである。

昔――さう遠い事でもない、私がおみちに入れて頂く前のことだから――失敗に失敗を重ねて、たうとう食へなくなつた。毎日々々、賣食ひをして、やうやく命をつないでゐた。そして、終には、何も賣る物さへなくなり、身一つとまでなつたのである。

今日、この頃の樣子を、私はかう悟るのである。

賣喰ひとは世界でもさう云ふし、私もさう思つてゐた。事實、品物を金にかへて食つてゐたのであるから、正に賣喰ひに違ひないのである。

だがこゝで、更に一歩すゝめて、おみち風に考へると、これは決して賣喰ひではない、それは何にも持てなくなつて、身一つにならねば生きてゆけないといふ狀態である。

初め私の歩いてゐた道は、十間道路であつた。それが、何時の間にか横道になつて五間道になつてゐた。十間道の時は、妻も子も手を引き連れ、何や彼や澤山の荷物を持つてゐたが、五間道になると、それが叶はなくなつて來た。その中に、道はますゝ細く谷まつて行くばかり、二間となり一間となる、も早や手を繫ぐ事は出來ぬ、妻子バラ〳〵となつて、手に持つてゐる荷物は邪魔になる、車に載んでゐた荷物は、そのまゝ放棄して了はねば、持つてゆけないといふ有樣。

たうとう終ひには、畦道になつた。かうなればもう身一つが精一杯である。命の爲めには持つてゐるものは皆手放さねばならぬ。

これが私の賣喰ひ姿であつたのである。

世間には、この横町に迷ひ込んでゐる人の姿を餘りにも數多く見せつけられる。何もより好んで横町にそれた譯ではなかつた。知らぬ間にさうなつてしまつたのである。

我身思案にこりかたまつた、なれの果ての姿である。

神様は、我身思案は、野中の一本杭同様、枝も出ないし芽も出ない、根先から腐つてゆくばかりや、と仰せられてゐる。

船が沈没した時には、荷物は全部すてゝしまはねばならん、身一つとなつて、命からく逃げ出すのである。横道に迷ひ込んだ人は皆さうである。何も彼も手放して、身一つとなつてやうやく逃げて行く。だが、その道さへも、終に谷まつて、逃げるに道も無くなり、最後に身一つのおき處に困るのである。

殘された道はこの身を殺すより外はなくなる、哀れな自殺心中の姿である。

このみちに入つて、私の勉強したことは、我身思案を取り除く事だけと云つてもよい。親の聲のまゝに動く事を我が生命として來たのである。

初めは東京にゐて、暫くして大阪に行けと云はれた。大阪で暫く布教すると、今度は神戸に行けと云はれた。私はそのまゝ行動した。私の布教地に關しては、神戸が最後の土地である。處がこの神戸が私には最も因縁の良い、幸福な土地なのである。追風に帆といふまでゝなくても、順調に運んで、今日となつたのである。

世界では、この身一つさへも持て餘した昔

おみちでは、幾十人の家族も連れてゆける今日

思ひ比べて、私は感慨無量である。

あの細道が、よくこゝまで太つたものだ、親の德とは云ひながら、何と有難い事であらう。

あとなるはみちはひろくでごもくなし　いくたりなりとつれてとふれよ

と仰せられてゐる。

人は幾十、幾百でもよい、また、どんな大きな荷物でも樂々に運べるやうなきれいな廣い道を早くつけさして頂き度いものと願ふのである。

逆立ち

『一生懸命になつてゐるのですがね、どういふ譯でせう、おたすけは上らないし、信徒はふえないのです。私の教會の神樣と、あなたの教會の神樣とはどう違ふのでせうか』

と云つて來られた人があつた。

『天理王命樣はたつた一つでしたね。私もあなたも、皆本部から同じ樣にその御分靈を頂いて來てゐるので、少しも違ふ道理がありません。私は、おたすけが上らないと云ふのが、不思議でならないのです。この教會の神樣はとてもよく働いて下さいます。貴方も、もう少し働いてもらつたらどうです。

『あなたは、今一生懸命と仰有いましたね、一生懸命とは、命懸けといふことでせう。命懸けのお助けにかゝつてゐる時は、人におさとしを受けたりするやうなものぢやありませんよ。——俺は命懸けでやつてゐる、命を懸けてゐる程の用木を神樣は殺すものか——といふやうな思ひが、チョク〳〵と頭をもたげてくる間は、お助けが上りませんよ。命懸けの境地は、そんな、人に捉はれたものぢやありませんね。

『あなたは、今、自分は神一條の道を歩いてゐると考へていらつしやるでせう、然し人や物にとらはれてゐるのは、神一條でない證據ですよ。

『その譯を申しませう。

この世界には順序の法則があります。今までは、物一條、人一條、神一條でありました。然し、吾々は、天理教祖を通じて、神一條、人一條、物一條といふ本當の順序を教へられたのであります。物、人、神とは、天の法則ではなくて、人間が定めた逆

様の順序である。吾々が物を持てるのは、眞直に立つてゐる時ですね、逆様になつてゐて、何も持てないのは當然でせう。

『この世界は、神様の支配下にあります。

　このせかいなにかよろづを一れつに　月日しはいをするとをもゐよ

と仰せられてゐます。吾々が、食ふことも、着ることも、住むことも、皆神様の支配であります。だから、吾々は、神様の支配を侵してまで、衣食住は考へなくともよい。たゞ、月日様の分け靈を頂いてゐるのですから、日月様のやうに、つとめぬくこと、働きぬくことだけをしてをればよろしい。

『親の名を汚さないのが子としての道である。もう一つすゝんで、親の名に光輝を添へるならば更に孝道が立つ。自分の食ふ事や着る事を忘れて、只親を慰め安んずる道を講じてゐるのが孝行者ぢやありませんか。腐つても鯛、どんなに汚ない魂かは知

れないが、吾々の魂は月日様の分け靈です。どうぞ、この魂の本質の輝きを現したいと思ひますね。それが月日様への親孝行の道ではないでせうか。

と話した事がある。

神・人・物

神・人・物。この順序は最初人間創造の時から定まつてゐるのである。

月日兩神が人間をお造り下された時、人間が樂しく暮すのを見て神も樂しまうではないかと御相談なされたのであつて、先づ神が第一である。次いで人間が生れ、更に、人間の生活に不自由のないやうに物質をお造り下されたのである。人は第二、物質は第三である。

人間のお産を考へてみる。

　たいないへやどしこむのも月日なり　むまれだすのも月日せわどり

と仰せられてゐる通り、元々人間を母親の胎内にやどし込んで下されたのが神様、こゝでも先づ神様が第一である。そして、生れ落ちて抱かれるのが産婆で、これは人間、第二である。それから産湯を使つて、着物を着せて貰ふのであつて、これは物質、第三である。

もとより、人一條と云ひ、物一條と云ふけれども、これに理が添ふて來れば、全てが神一條に同化してしまふのである。只、今日の世界に於ては、神の理の添はぬ、我身思案ばかりの、人一條、物一條がはびこりすぎるのである。こんな、物や人によつて治まる世界ではない。神一條に添ふた、物一條であり、人一條であつて、初めて明るい世界が生れるのである。

日本は萬世一系の皇室を頂く、人も物も、我身思案に支配されずに　天皇陛下の御

爲めにと　天皇陛下を通して生かされる時、根の國日本の使命を達成するに足る明朗な社會が生れて來るのである。

御教祖五十年間のひながたの道を見るとき、一面に於て、この、神・人・物の正しい順序をお示し下されたものと思ふ。

親戚や世人の嘲笑と迫害をよそに、ひたすら、神命のまゝに物質を手放して行かれた。神一條の道をたてきる爲めには、斷じて物にとらはれてゐることはない、人との協調もない、物も人も手放していつて、初めて神一條の道が立てられるのであるといふことをお示し下されたのである。

八十歳を過ぎられた人生の晩年、物氣一つなく、近い身寄りの人に淋しく、思へば孤影悄然たる中にあつても、おやさまは、四十年の昔、全てを手放されたのをいさゝ

かでも悔いられたであらうか。人としては寂寥限りない境涯である。然し、おやさまの御心は、日月の輝く青空のやうに明るかつた。やがて來る可き往還道とぢばの榮えを眺められて、御心は燃え上つてゐた。そして、蕭條たる寒村三島を指して仰せられたお言葉の、何と素晴らしいことであらう。

八丁四面は鏡屋敷
奈良初瀬七里は宿屋で埋まる

むりにこいとはいはんでな、いづれだん〳〵つきくるで
をもしろやをふくの人があつまりて　天のあたゑとゆうてくるそや

と仰せられてゐるのである。

おことば通り奇蹟の渦が卷いた。世界から人が集まつて來た。物が集まつて來た。そして、今日のおぢばの姿となつたのである。

成人の順序

机や障子や——物に頼らねば歩けないのは赤兒の時代である。

大人に手を曳いて貰はねば歩けないのは三つ兒の時代である。

物も放れ人手も放れ、自分一人で歩けるやうになれば成人したのである。

物・人・神、この三段の時代を通じて、神様はその時に應じて物をお與へ下さるのである。

五つや六つの子供が泣いて強請んで、十貫目の物を持ち度いと云ふ。親は斷じて持たさない。子供が可愛いから持たさないのである。十貫目の物に子供がその身體を滅ぼすことが親には見えてゐるからである。

金がないから金がほしいと思ふ。金があれば、食べたいものを食べ、遊びたいだけ遊び、買ひたいものを買はうと考へる。金の爲めに身を滅ぼしてしまふ事を考へない

のである。

金がほしいと思つても與へられないのは、その人のためにはそれで恰度よいのであると知らねばならぬ。物は成人次第に與へられる筈である。

匂ひがかゝらん、信者が出來ん。それで恰度よいのである。神樣をうらむことはない。成人の足らざる我が心の錬磨に、懸命の努力を捧げてゆけばよいのである。

物や人に捉はれてゐた我が凡慮を思ひ返す可きである。物を忘れ人を忘れて、只管に、御教祖のひながたを憧れて進む道があることを悟らねばならぬ。

我神と倶に歩む境地は、物や人に關する一切の不足不滿から開放せられた陽氣づくめの世界である。さりとて、このみちは、深山に立て籠つて修業するのではない。物や人の中に立ちまじつて、この中に、神一條の道を歩むのである。こゝに、里の仙人の、面白さがある、陽氣ぐらしがある。

いまゝでと心しいかりいれかへて　よふつくめの心なるよふ
この心どふしてなるとをもうかな　月日たいない入りこんだなら
にち〳〵にひとり心がいさむなり　よふきづくめの心なるよふ
月日よりにち〳〵心いさめかけ　よふきつくめにしてかゝるでな
と仰せられてゐる。

にち〳〵に心つくしたそのゐは　あとのしはいをよろづまかせる
と仰せられてゐる。

五つや六つの子供に、十圓も廿圓ものお金を持たせる親はない。又、二十にも三十にもなつてゐるのに、何時までも子供のやうに思ふて、一錢や二錢のお金を持たせる親もない筈である。小さい時には、泣きわめいても與へられなかつたものも、大きく

なれば默つてゐても授けられることになるのである。

吾々が、求めねばならぬものは、物でもない、金でもない、人でもない。只、よろづの支配をまかされる心の成人である。

おたすけが上らないのではない、信徒が出來ないのではない。理の子供を大勢持たせられないのである。理の子供の親としての、心の成人が出來てゐないのである。

道づれ

子供連れの夫婦が散歩してゐる。子供はヨチ〳〵歩きで、嬉しさうに飛び歩いてゐた。何時の間にか、お父さんもお母さんも、子供を忘れてしまつた。夫婦同志で、いゝ氣持ちになつてしまつたとする。

子供はうしろの方でわん〳〵泣いてゐる。

『そんなに急いでも僕はついて行けないや』

といふのである。尤もな話である。

親達ばかりが、さつさと先に進んでも、子供を放つておいて泣かしてゐては、本當の散歩にはならぬ。泣いてゐる子供を後に放つておいて、親達もいゝ氣持ちにはなれぬ。

成人の出來てゐない子供と歩調を合して歩いてやつてこそ、樂しい散歩ではあるまいか。

神樣は、

『神が出て働けば一夜の間にも道つける』

と仰せられてゐるのである。それなら、更生運動の今日の旬ではないか、吾々がこんなに苦しんでゐるのに、何故、神樣が一夜の間にも道をつけて下さらないのであらうかと考へる。

神様は子供の陽氣遊山を見て樂しみたいと仰せられる。神様は、達者な足をお持ちである。ドン〳〵と前に進みたい。が、吾々用木の足は、神様と同樣に成人してゐるであらうか。

『一夜の間にも道つけて下さい』

と願ふのはいゝ。然し、さうなつて、神様が本調子でドン〳〵と進まれたら、私達は後にとり殘されて、泣くのではあるまいか。

私達が泣いては神様も勇めぬ。神様は、のろ〳〵歩きの私達と調子を合せてゐて下さるのである。

小さい子供を抱いて散歩に出る親達は、早く歩いてくれるやうになればと願ふ。少し歩けるやうになると、もつと達者に歩いてくれるやうになれば、どんなに樂しい散歩が出來ることであらうと思ふ。

神様は、私達の成人をおまち兼ねになつてゐるのである。わけても、今日のやうな旬なれば、なほの事、神様のこの御心には切ないものがあらうと思はれるのである。

私は、先日こんな問題に就いて自問自答したことがある。

『近頃、宗教々育が叫ばれて來たね』

『それをお道で買つて出たらどうだ』

『とても出られないね』

『ぢや、向ふから頼みに來たらどうする』

『出來ないから頼みに來ないよ。おみちで出來ない事だから、神様はおみちをお使ひにならないさ』

『出來ない〳〵つて、お前は何故そんなに卑下する。今日のみちは堂々たるものぢや